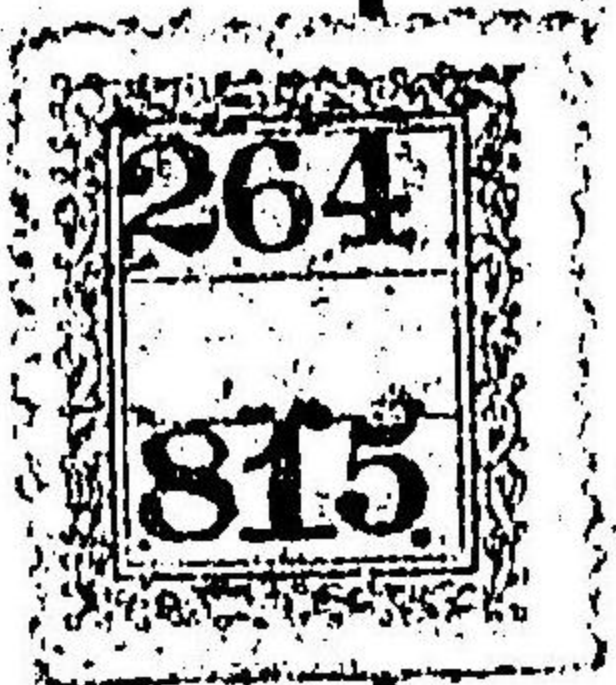
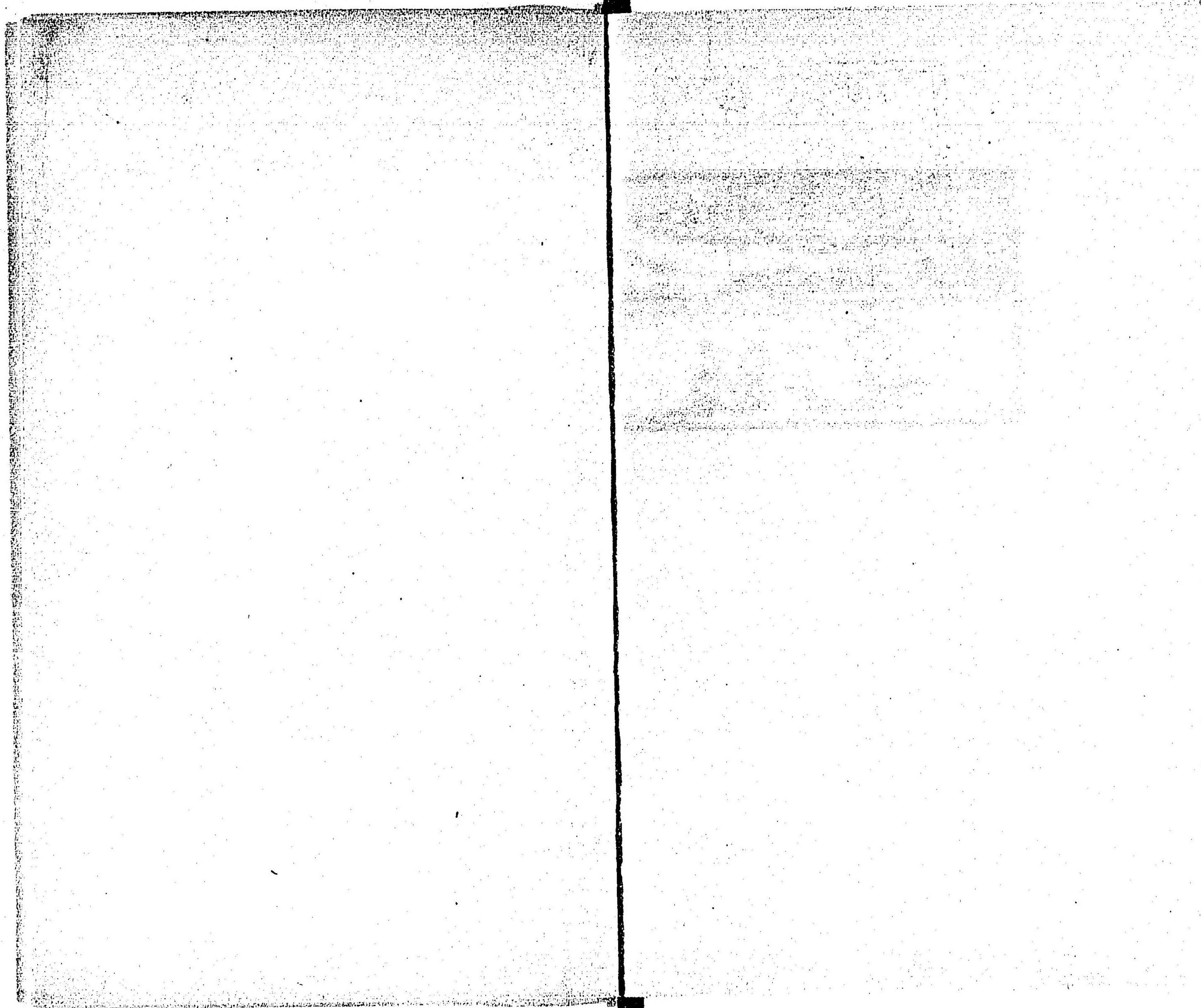
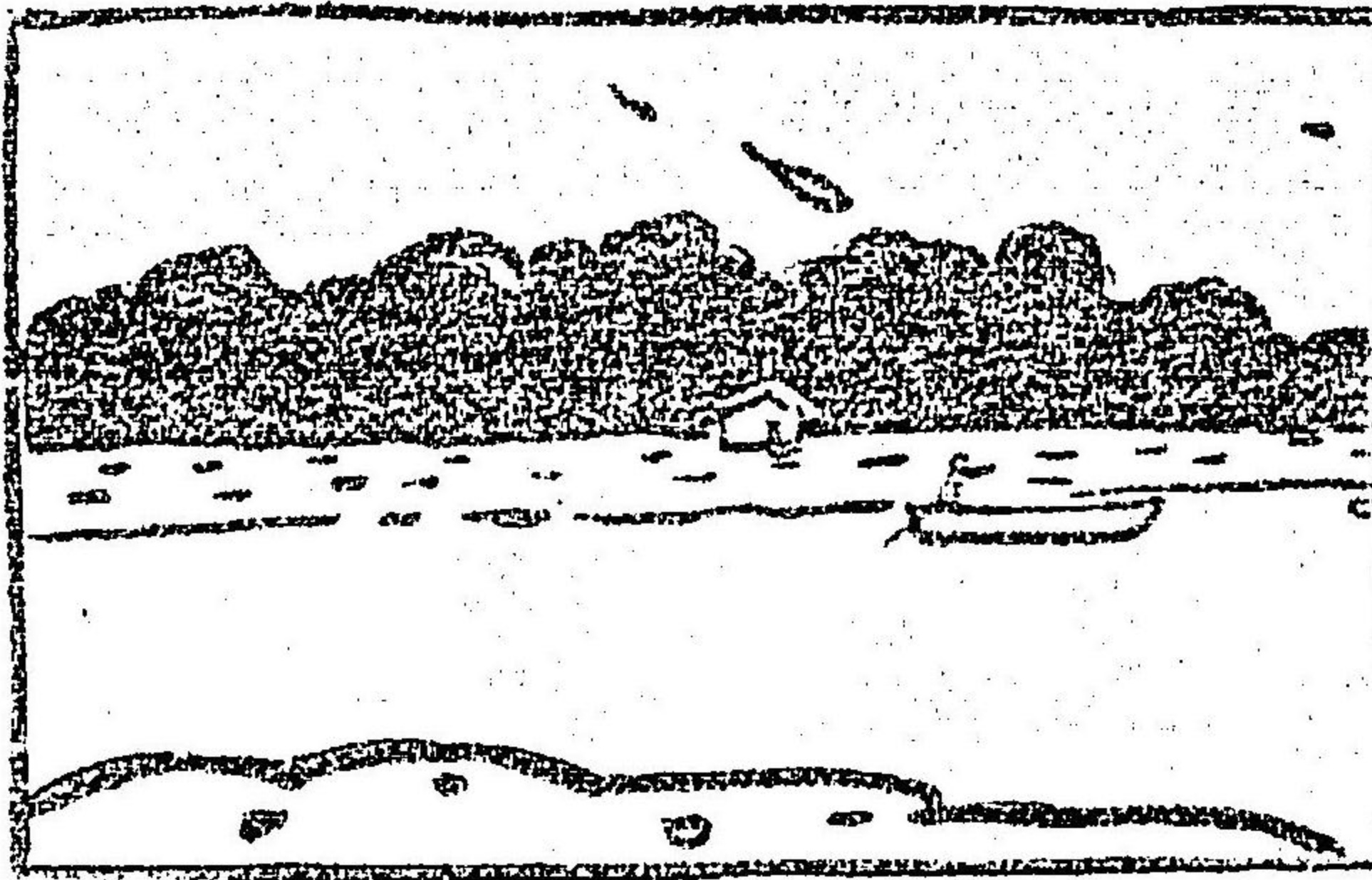


集詩ズカミス
卷の妹



作一純崎宇



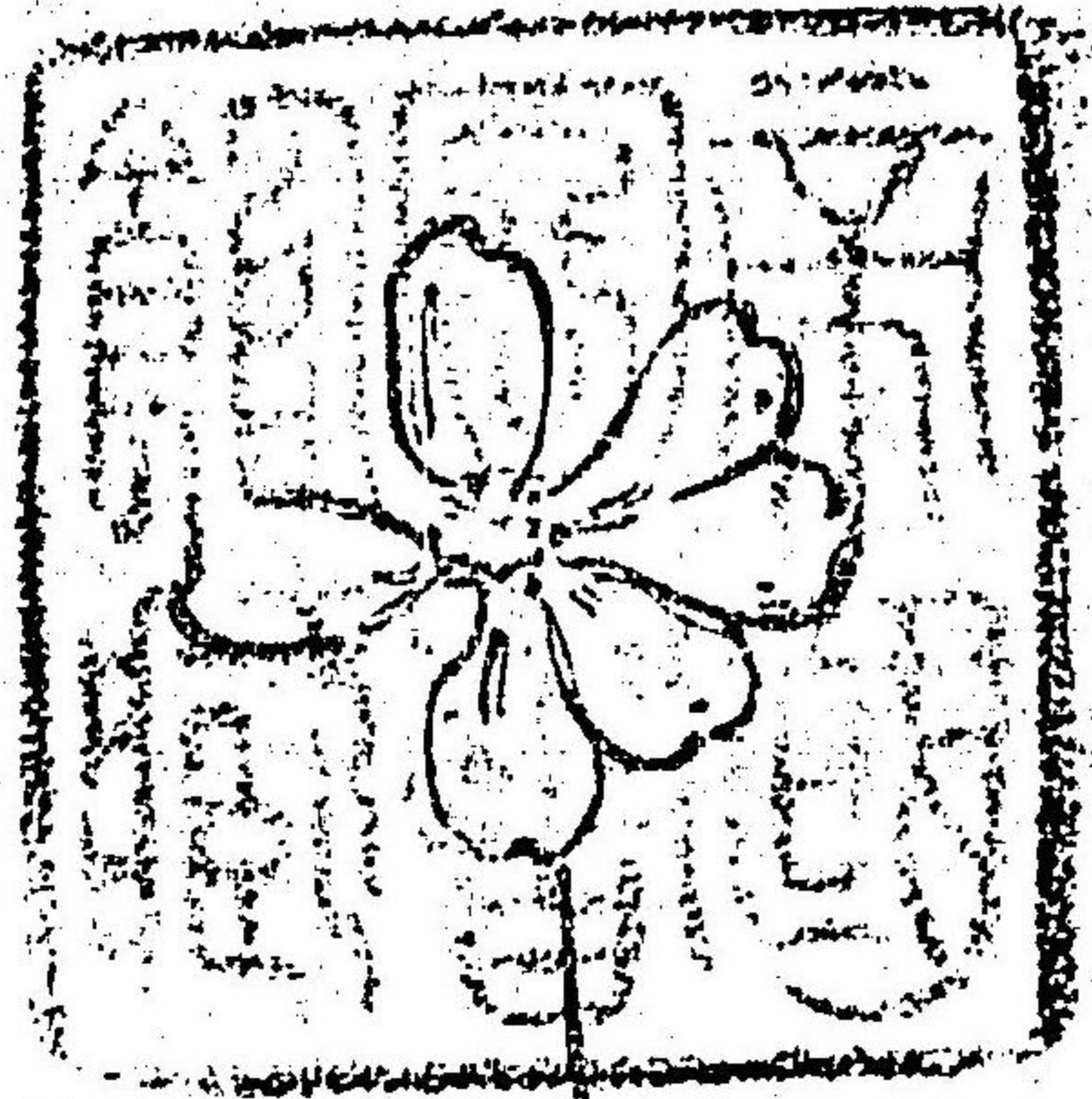




別
れ
な
り
し
ば
な
ら
ぬ
人
達
に
さ
し
あ
げ
ま
す

特23

263



純一
作
文
集
妹
の
巻

44. 3. 13



なつかしき人達との離散は、眼の前に迫って来ると、
 春はもう盡きて了ふのでせう。
 思つて今更ながら、私が千九百十年の三月から十二月
 描いたすべての作品をながめまゝみまき、一つとして
 の胸に溢れた堪へがたい歡樂の結晶でないものはあ
 りない。
 は、この淋しい胸に、この紀念の遺集を抱いて、冷たい涙
 しながら、暗い家に生きればならぬ。

「思ひ出」お前はかりが私の情人になるのでせう。
 哀傷の賜よ。
 さようなら。

「君の過去を知らうと思へば、華陽君の過去を聞けばいい。華陽君の過去を聞かうと思へば、君の過去を知れば十分だ。」

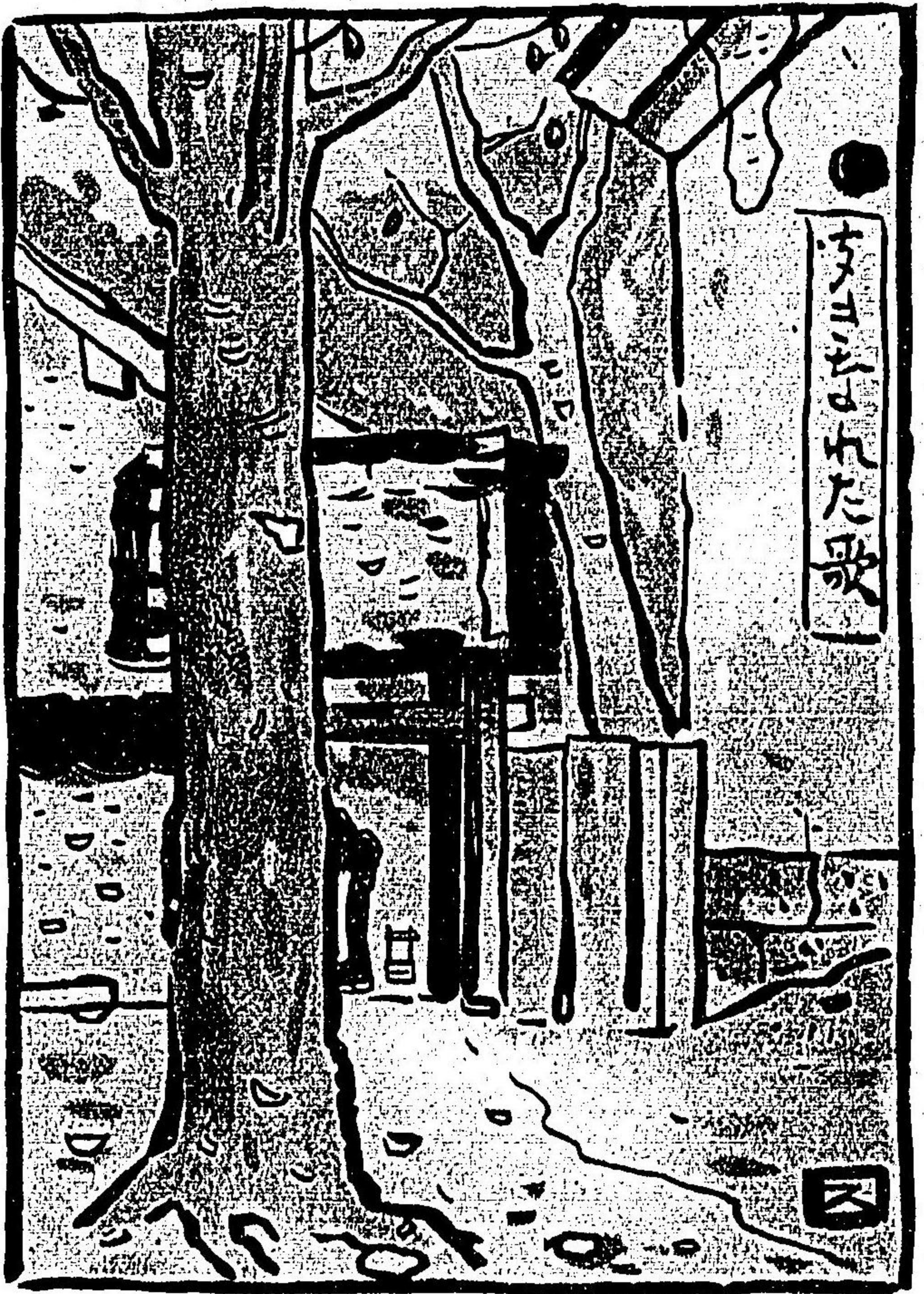
此、杜芳君の言葉は、私と華陽君とがこの世に生れおちるからの私交、及び運命を等しくしてゐると云ふ事實を説明するには、私を知つておてくれてゐる人達の否定することの出来ない適當の言葉でありませう。

随つて、私が藝術の上に於て、華陽君からどれほどの感化指導を受けましたことやらそれは解りません。

思へば君は感傷した詩人であります。今日の君は既に詩に別れんとしてゐますが、然しながら私は小説家としての君よりも詩人としての君、一切の醜悪と背徳の美に、幾夜を泣きあかした君が、たまたまあつかしいのです。

あの悲しくも爛れた詩をうたつてゐる君は、画家としての、私が世の中のすべての見解を尤も切實に教へて呉れた人なのです。

ことに、ムードを畫面に現はすと云つた點に就ては、私の描かんとする畫の本領であつて、ムードを没却してこの畫に、何等の肉の權威音楽



の價値を發見することも出來ないこと、極言して私の今日をあらしめたのみならず、私の、この拙かい作を世に出すやうに力を盡してくれた人なので。

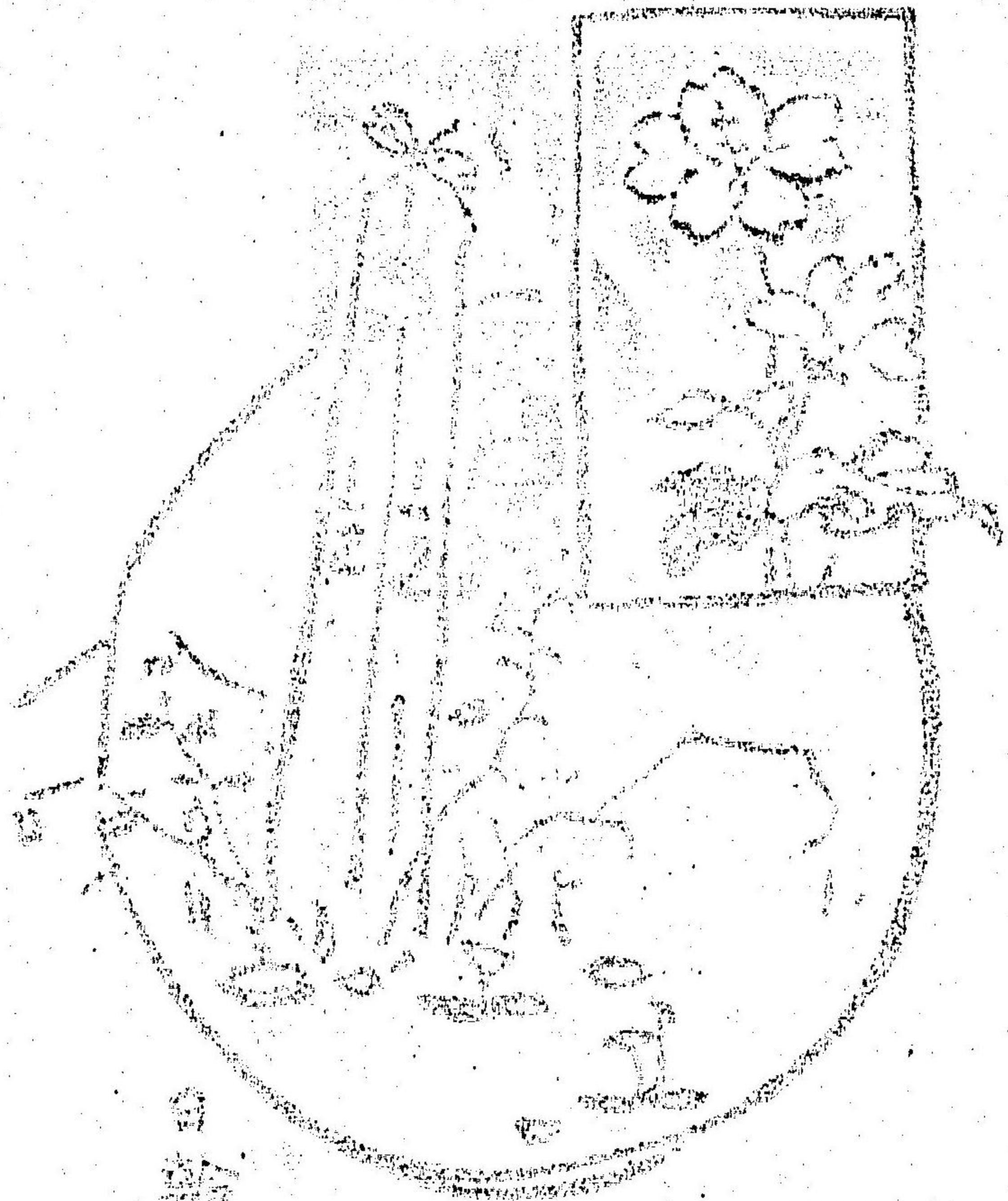
私は、これらすべての意味からして、紀念するために、君が旅から送つてくれた手紙を、この書集に記載することを、たつて承諾して貰つたのであります。

こゝに華陽君に對して、滿腔の感謝をさしげます。

石の歌うたひて君と
戀はての光れる海に
來は來つれども

中

一



舟
の
花





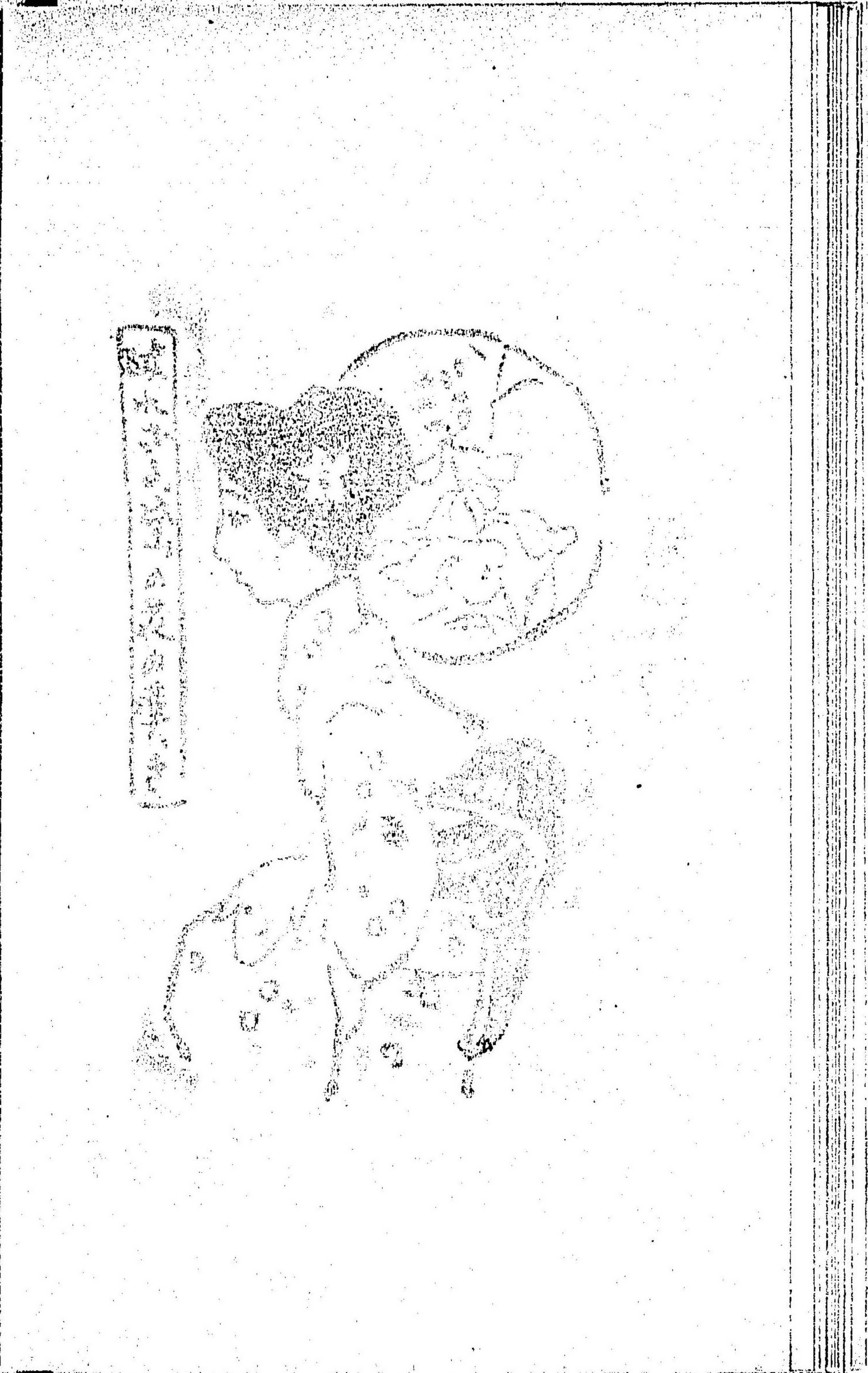
高田の壺

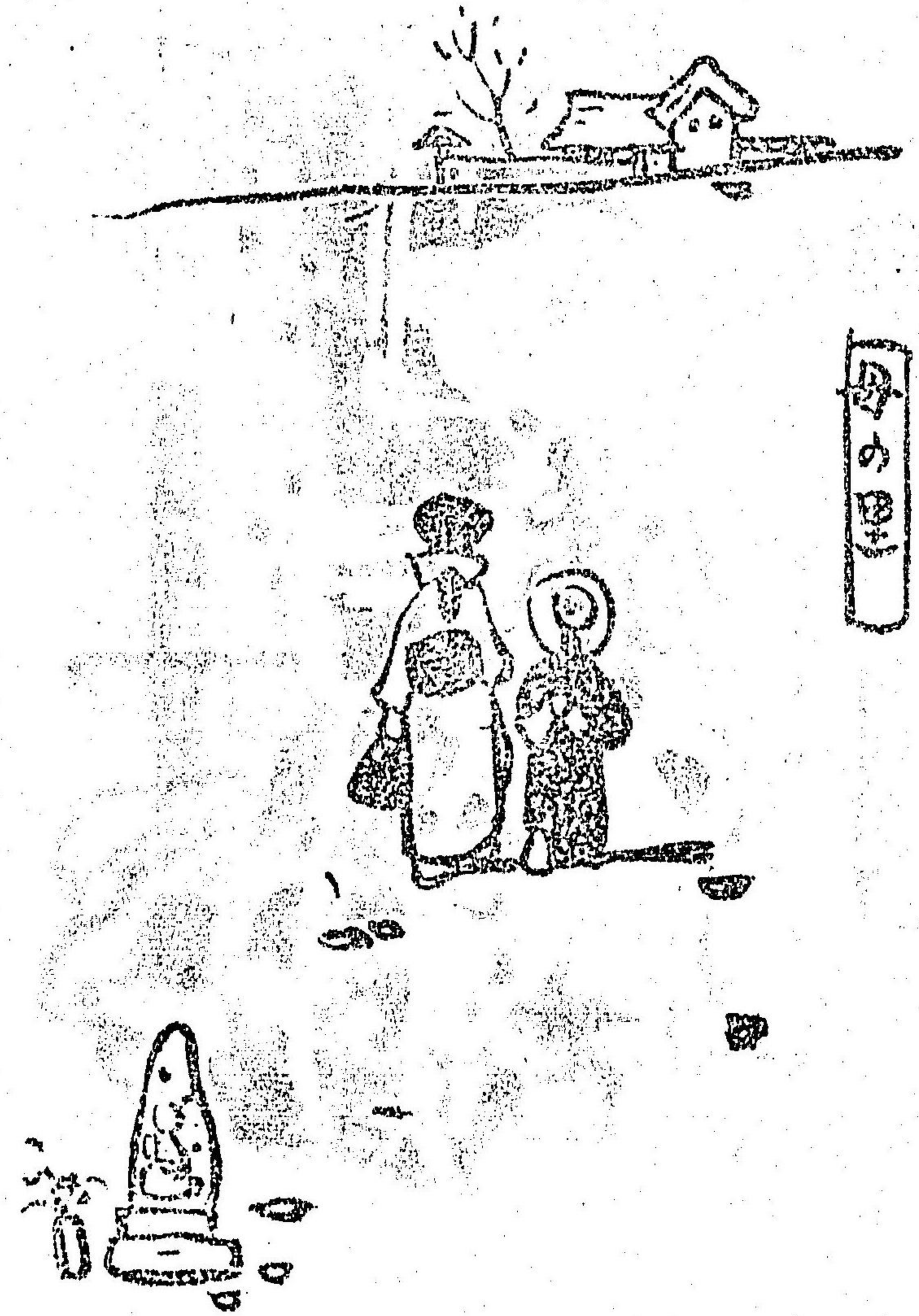
大和國高田郡壺阪

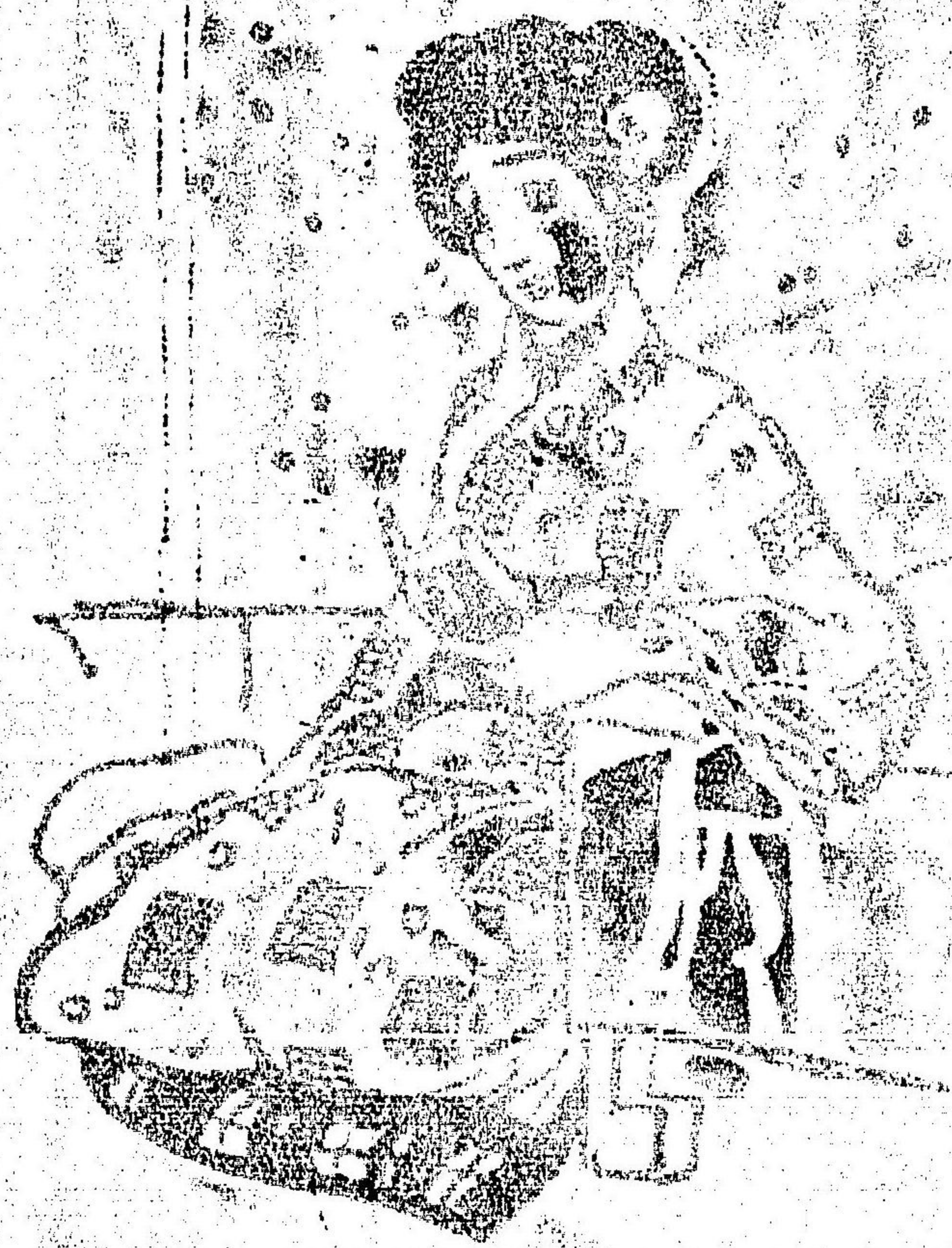


壺

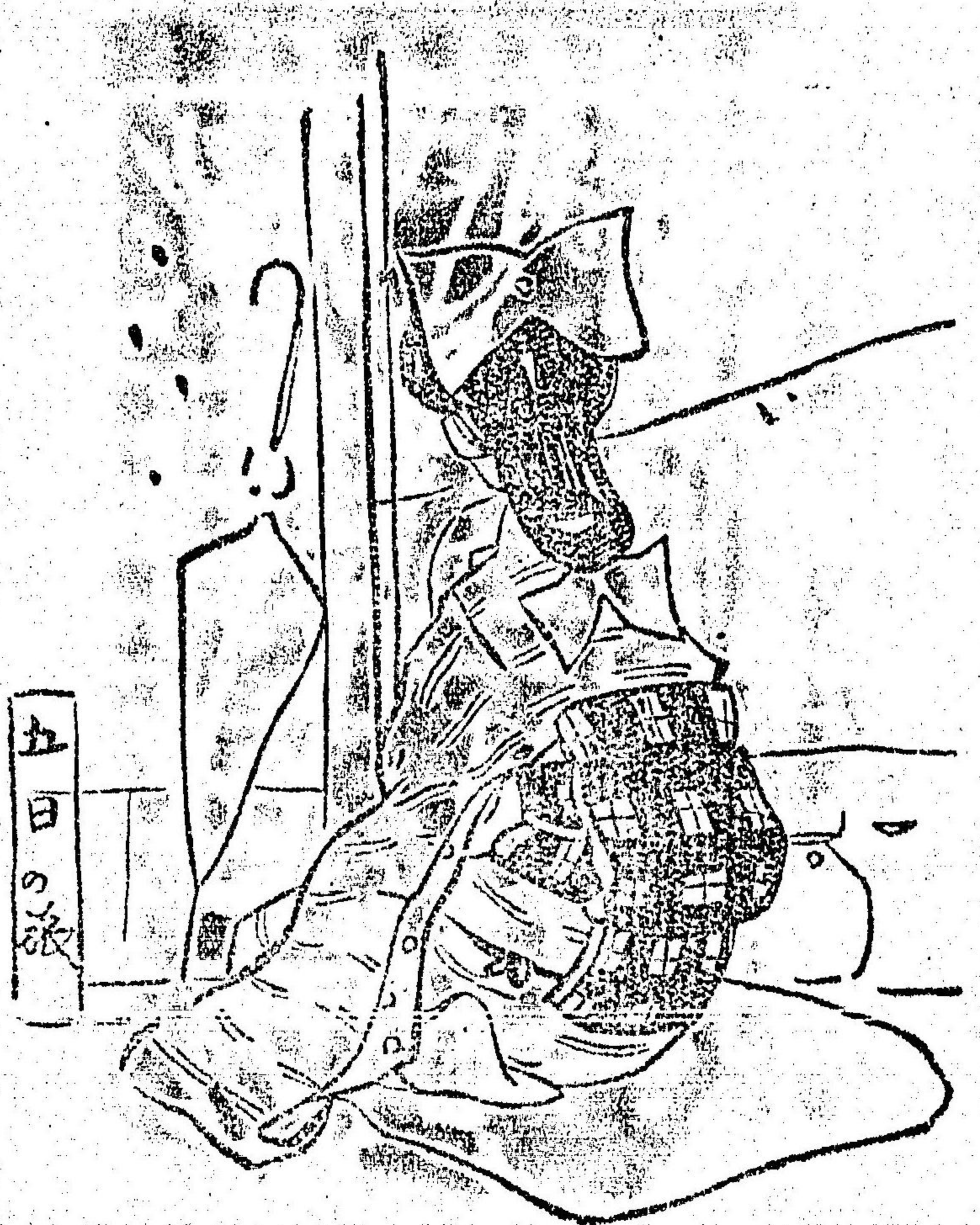
壺







一騎の春



五日の旅

君さまよへる心ほど情ないものはない
 僕は、どうしていゝんだか解らぬ。只、もう疑
 つとしてゐられなくなつた。

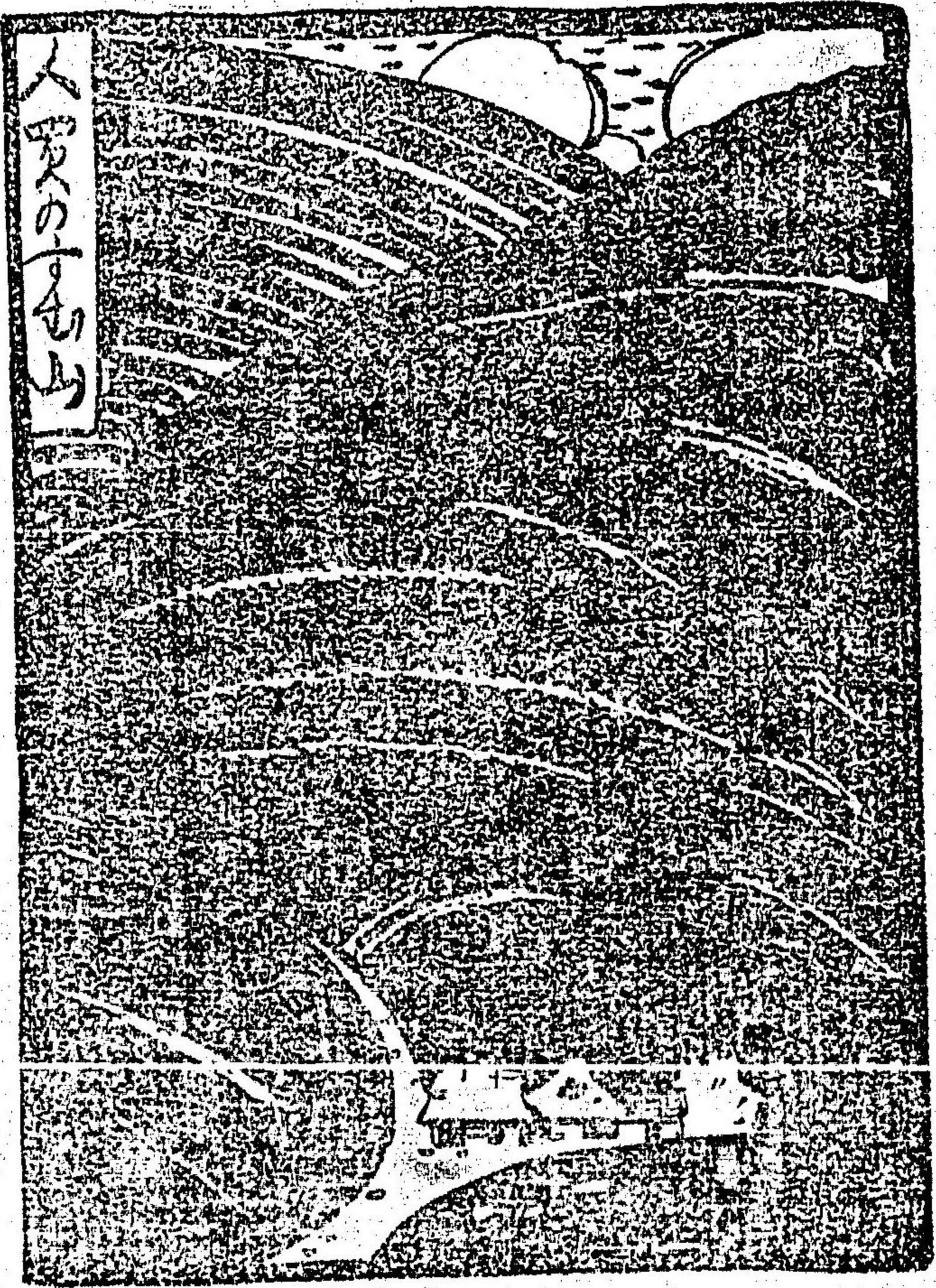
旅に出やう、旅に出やうと思ふのだ。
 緑の丘に、潤れたる沼は、灰色の村に、一日、二日、
 三日、悲しき歌をうたひながら、かくして去りゆ
 かばこの茫漠たる歩みの中に、何物かの私語を
 聞くことが出来るかも知れない。
 別るゝものよ、
 さよならならん。

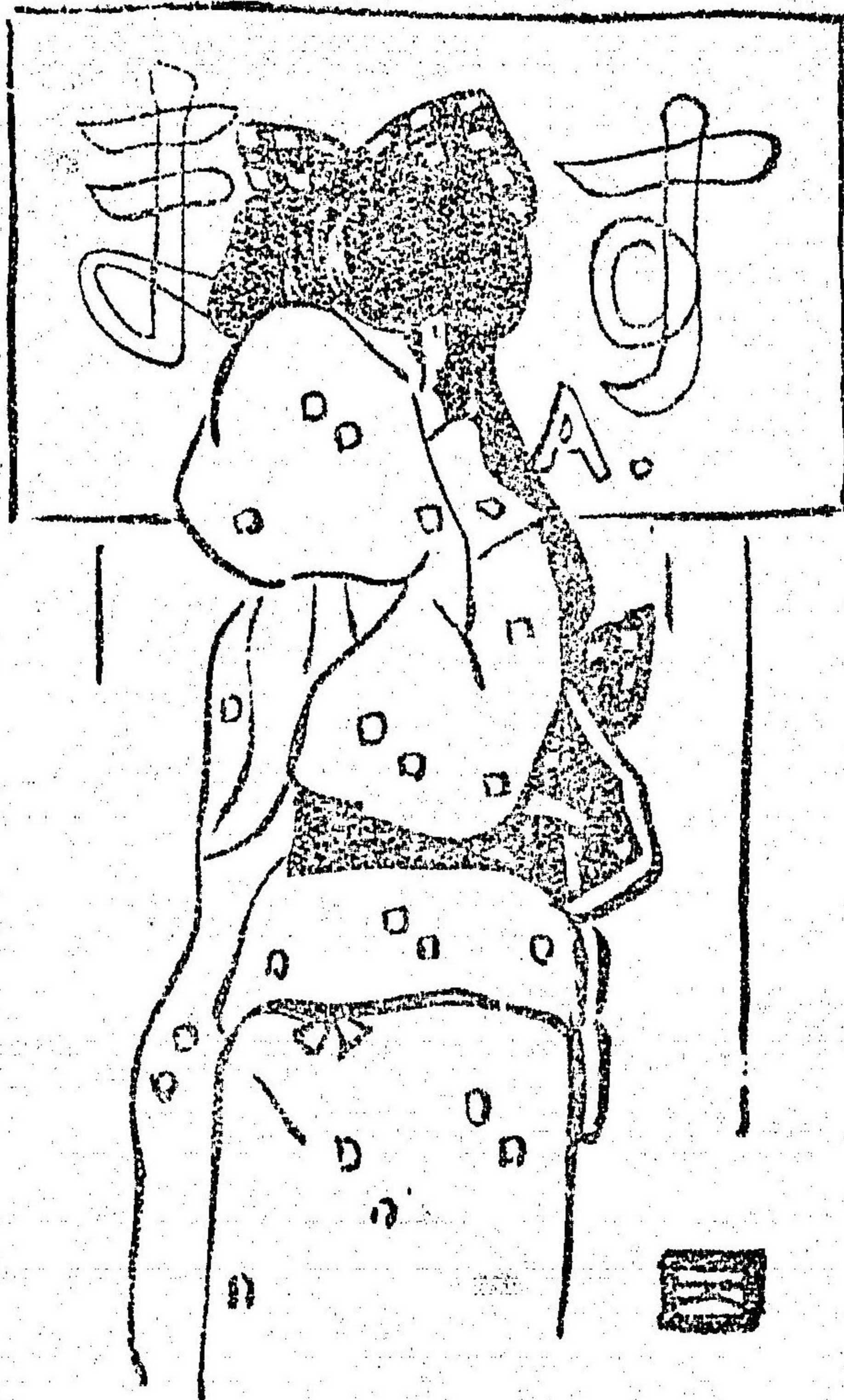
一九一〇、八、五

煤煙をのぞみて

華

陽





少女の歌聲が何處かで聞ゆる。
 その歌が、また何處かで一度聞いたことのあるやうな、なつかしい歌なのだ。
 君、まだ雨は降んでゐない。
 夕方から降り続いた雨は、窓から漏れた光線に照つては、その少女の歌聲と、しつとりと縫れて、白く濡れた瓦を、壁の土を。
 それから、光つた青い葉の梢から梢に、路上の砂から砂に降りそよいで、は泣き濡れて、孤獨ある旅の心に進み入るではないか。
 君、思つて呉れ給へ。

こんな、淋つた静かな夜ほど、過去のことを考へさせられることは、またとあるまい。

名も知らぬ村里をさまよつてゐるうちには、しらすく、僕はふと、須磨にまで来て了つたのだ。

須磨は、君ばかり「悲しき記憶の濱」であらう。斯う思ふと、僕は、多くを語るに忍びない。多くを語るに忍びない。

今にして△ちやんが生きてゐるならば、君は、幾度にも淋しい生涯を送つてゐるのではなからうに。

あはれにも、こひしい生き別れに泣いた君よ。あはれにも、なつかしい死別の人に似た少女の歌聲よ。

遠く岸に舟ける海の音は、君に似て来た。またさようなら。

一九一〇、八、九

須磨にて

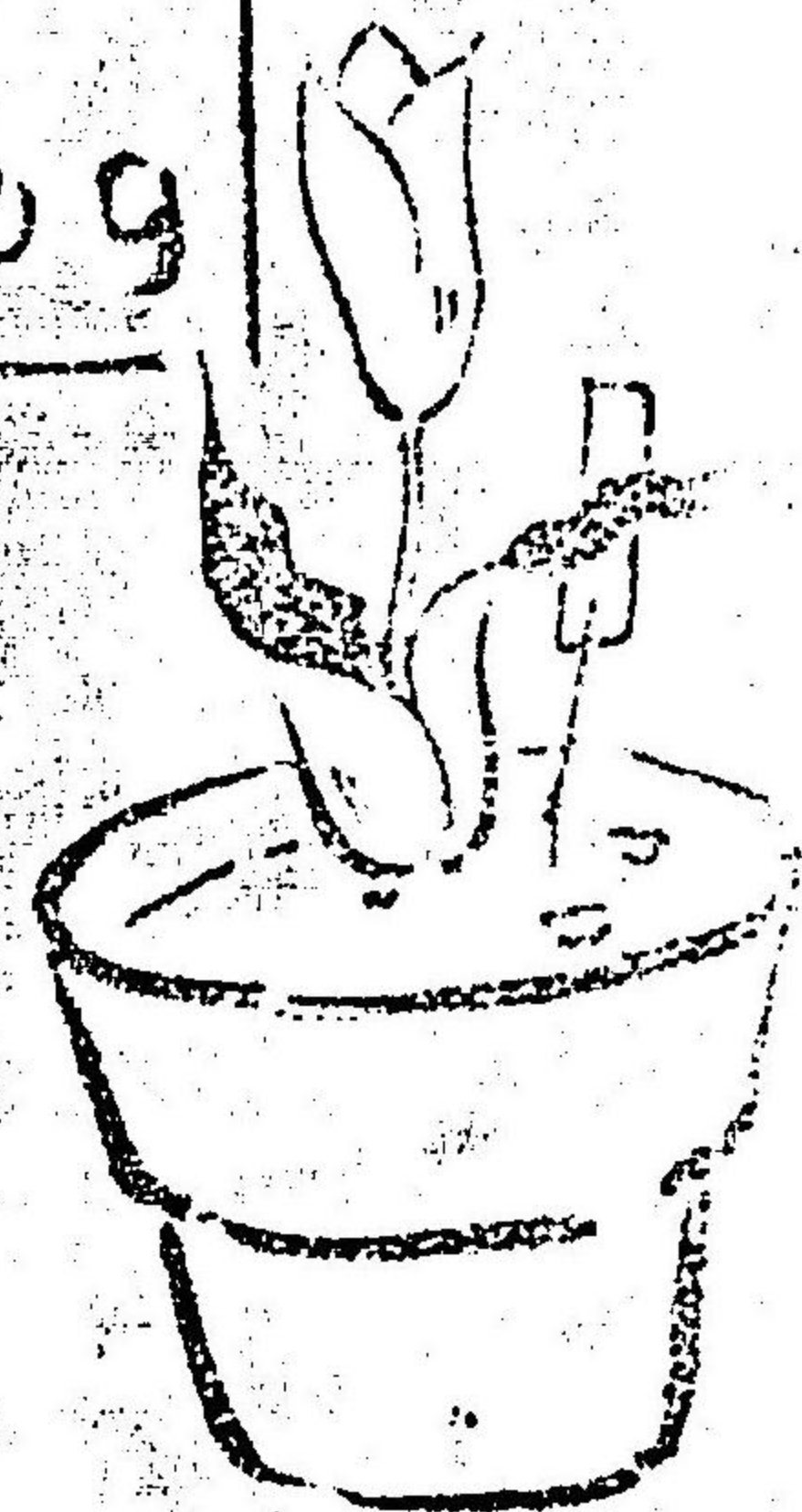
出

郵便受



替り物

11th
Apr.
1909





おきりこ



おきりこ



乳屋の娘







この那波に着いたのは、もう、村に夕餐の煙が
上るころであつた。

太陽の光にちりくと照りつけられ、惱んだ
白い花をながめ、傷ましいせみの嘆きに追はれ
ながら、けふばかり五里の並木路を歩くに辛い
ことはなかつた。

それから僕は、宿の風呂に入つた。

焼つた、しかも濡つた暗い天井は重たい。
みしろぎもせず、斯う、あてもなく思ひに沈んで
ゐると、裏の畑からは、なつかしいこほろぎの啼
く聲が、弱々しく聞えて来るではないか。

君、

勞れた胸には、知らず、寂しい涙がこぼれ
て來た。

かの蛇のやうに、恍惚い鹿の夢は、この僕の
燃した肉を刺戟することゝが甚しい。
因はれたる取瀬の都會詩人は、君、悲しいで
いか。

いま、茲、庶切ない思ひをして、湯上りしたばか
り、もう失敬する。

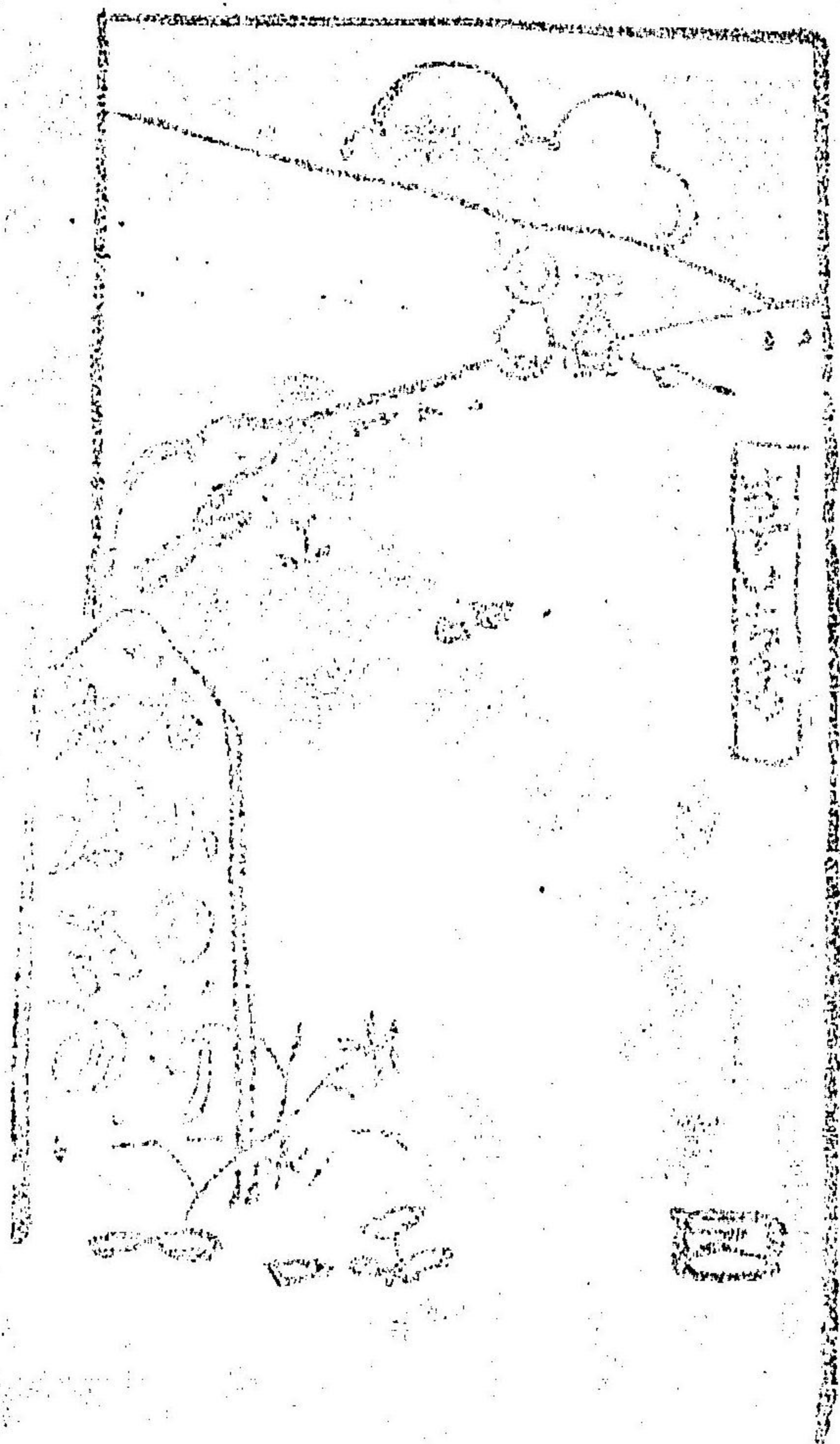
一九一〇、八、一〇

那波の宿にて

華

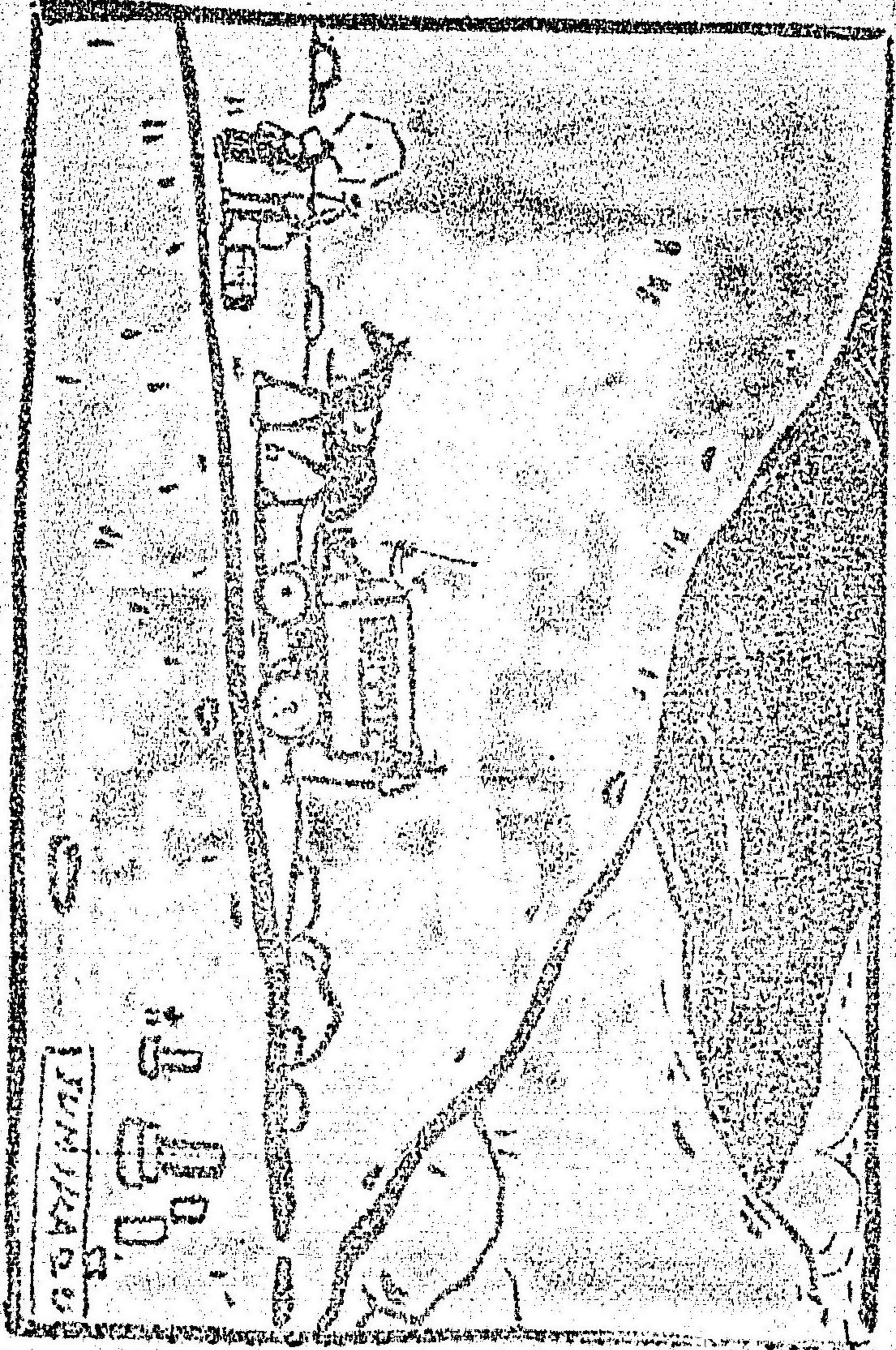
陽





六ノ八

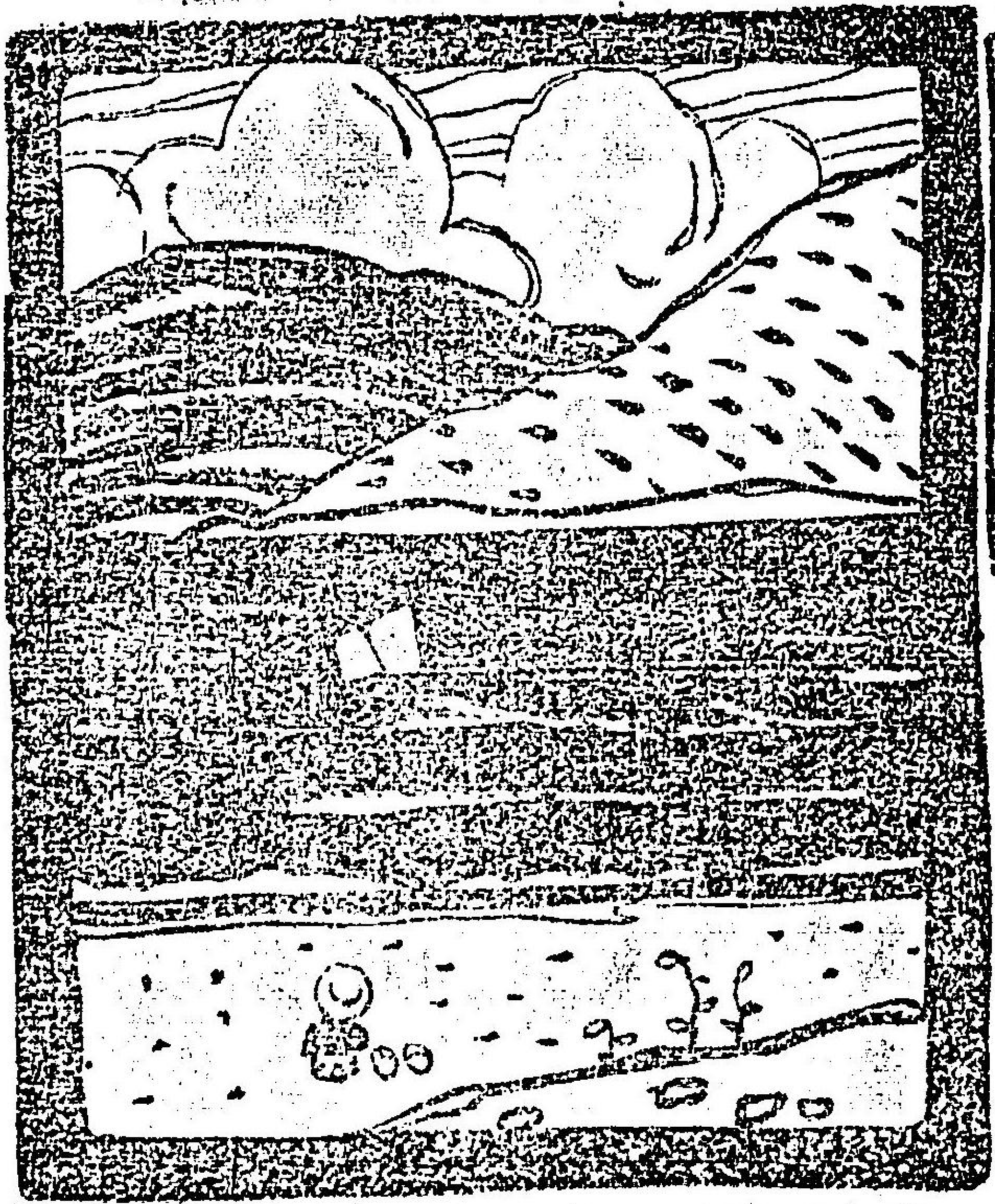




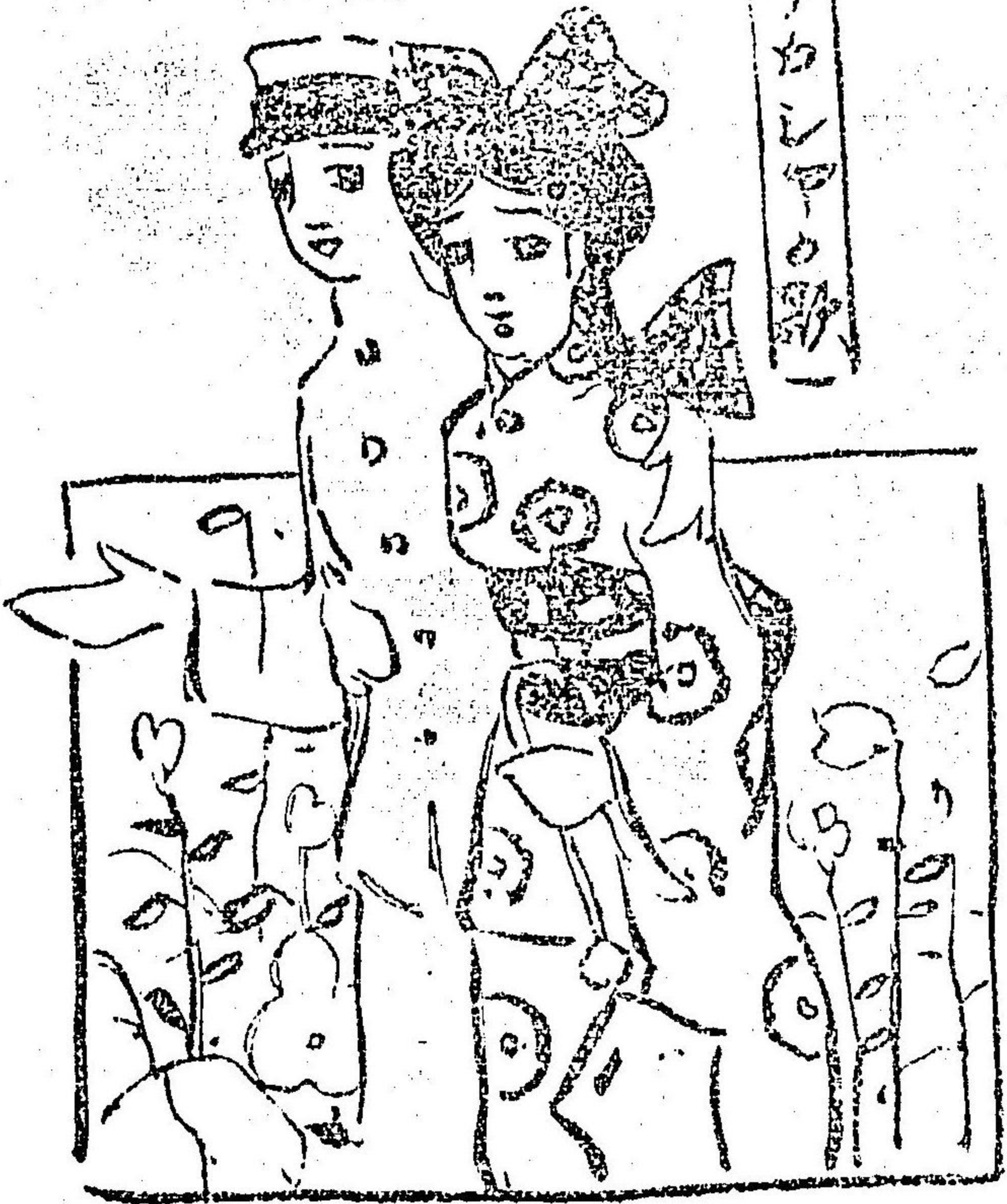
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



舟中三友



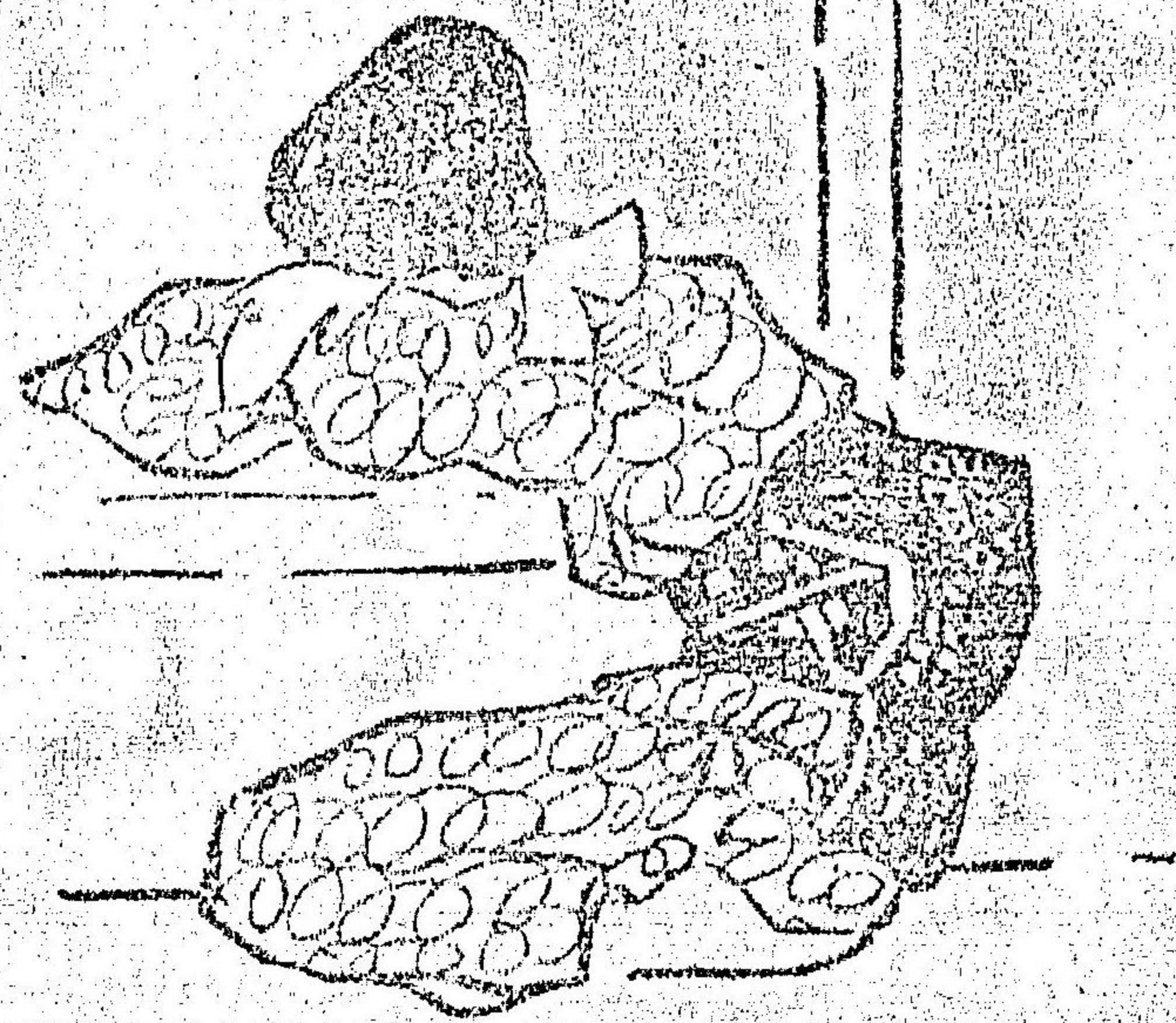
春の山景



春の山景



卷二四



一

竹屋



竹屋



散樂の夢の滅亡しるる哀しみが、溢みくと
感じられる。

お互にさうだが、然し旅程、また心を測的にさ
すものはなからう。

僕の胸の裡に展けたあひさまは、この世から
遠く忘られた、一鳥もすまない、物静かに、郊外、静
しい影を落した白楊の並木と、路傍に捨てられ
た冷たい石と、茫々として醒しもなく、息もない
曠野と、それから一切の物象に畏げかけられた、暗
木の、弱い夕陽の光のうち、そこに僕は、僕が歸
るべき果もあらず、何處を宿とせんすべもなし

只徒らにうらぶれて、一行路の一人を散らすと云
つた流人のやうに歩いてゐるさし、かと思ふ、かとい
今の旅の悲しさが、什麼であらうと君は思ふ、
やがては落日の魔の手で囚はられて、暗い夜
に閉たらしく虐たげられるのであらう。
夜が明け放れるとなが、いゝさがついとも。
嵐が狂ふ、……永切に散はれさうもない白
楊の葉が懐へて、金の葉が涙の雨を降りそいく。
雪が散る……久遠にニデンを知らぬ、新緑
の石の肉は腐れて、醜い屍を蔽ふものは、灰色の
墓である。

流入は凍れて倒れて了つた。
荒み切つた、餓れた心にも、猶一盞の微温の血
が涸れずに残つて居るならば、それはあまりに
無残である。

思へ、まことに恨めしいのは、運命が、美しいロ
ーマンスを制作した傷ましい「思ひ出」ではある
まいか。

さようなら

一九一〇、八、二三

班鳩にて 華

陽



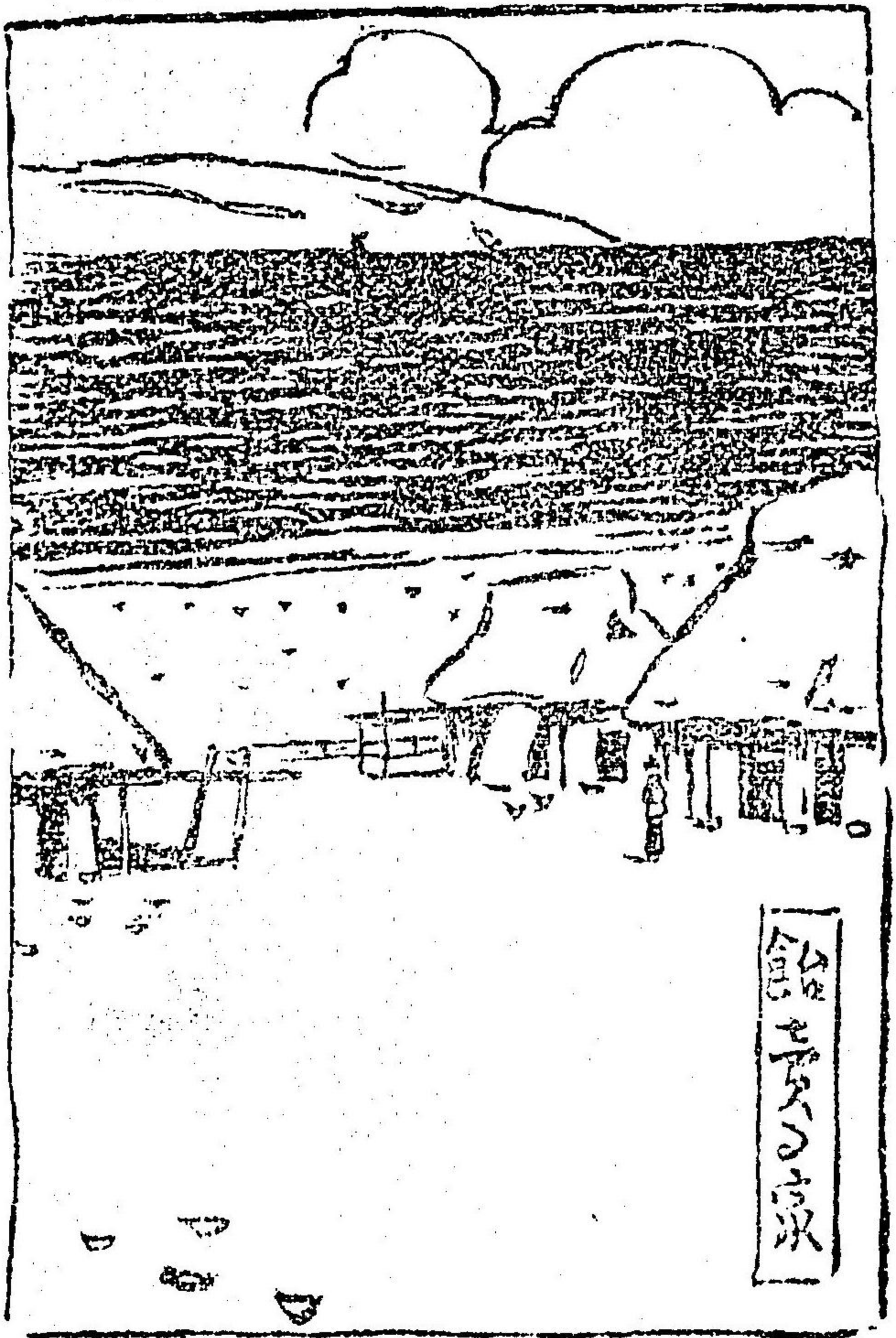


夢日記憶

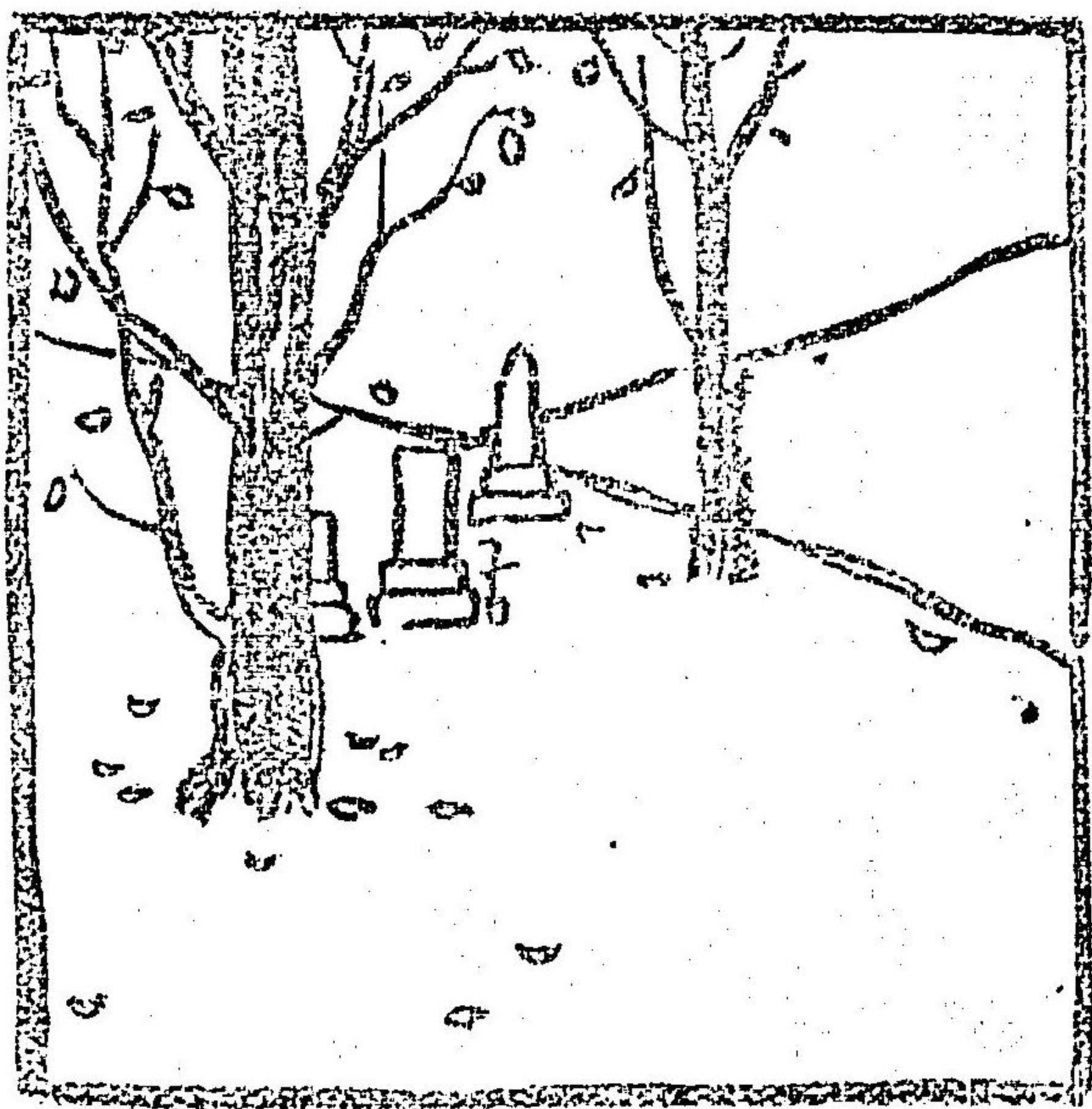


杯の木口歌









RAPPALIE - 101,

見知りたる小女に別れ
見知らざる遊女にまかれ
けふもたはむる

都の君よ、
旅の身を憐れめ。

淋しいがまゝに泣き濡れて、うたつたこの歌
は、僕がいまの心のありさまを語るに十分であ
らうと思はれる。

然し、最うこの地を去る。實は君まつたくこの
地にゐるのが辛くなつて來たのだ。

桑溪は、耶馬溪のやうだと、杜芳君から聞いて

ゐる。

行かう、行かう。

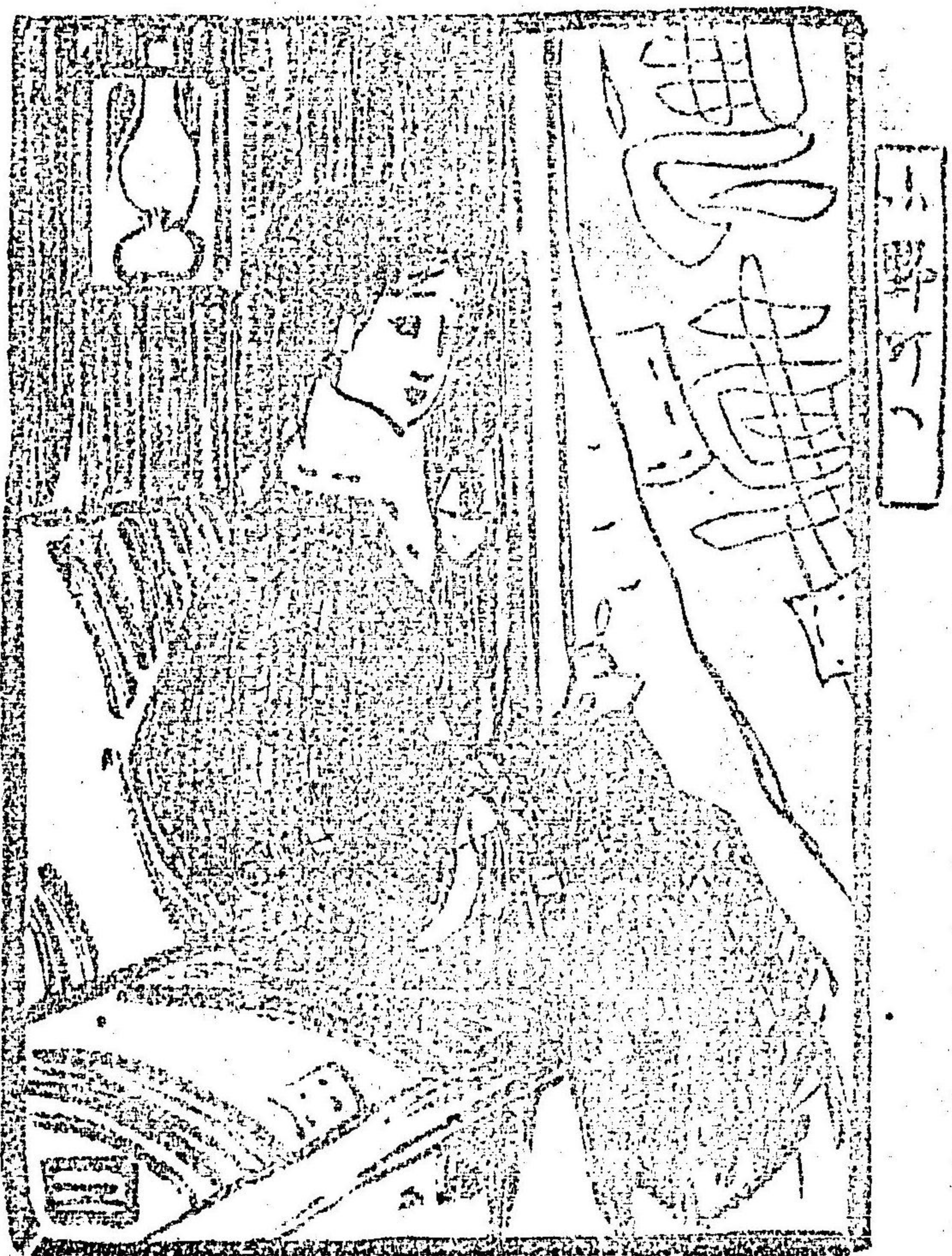
あゝ、なつかしきは、茂き木の葉の静かなる舞
踏よ。

あゝ、こひしきは、底知れぬ深淵のかすかなる
音楽よ。

行かう、行かう。

新らしき耽美の光は僕を照らす。

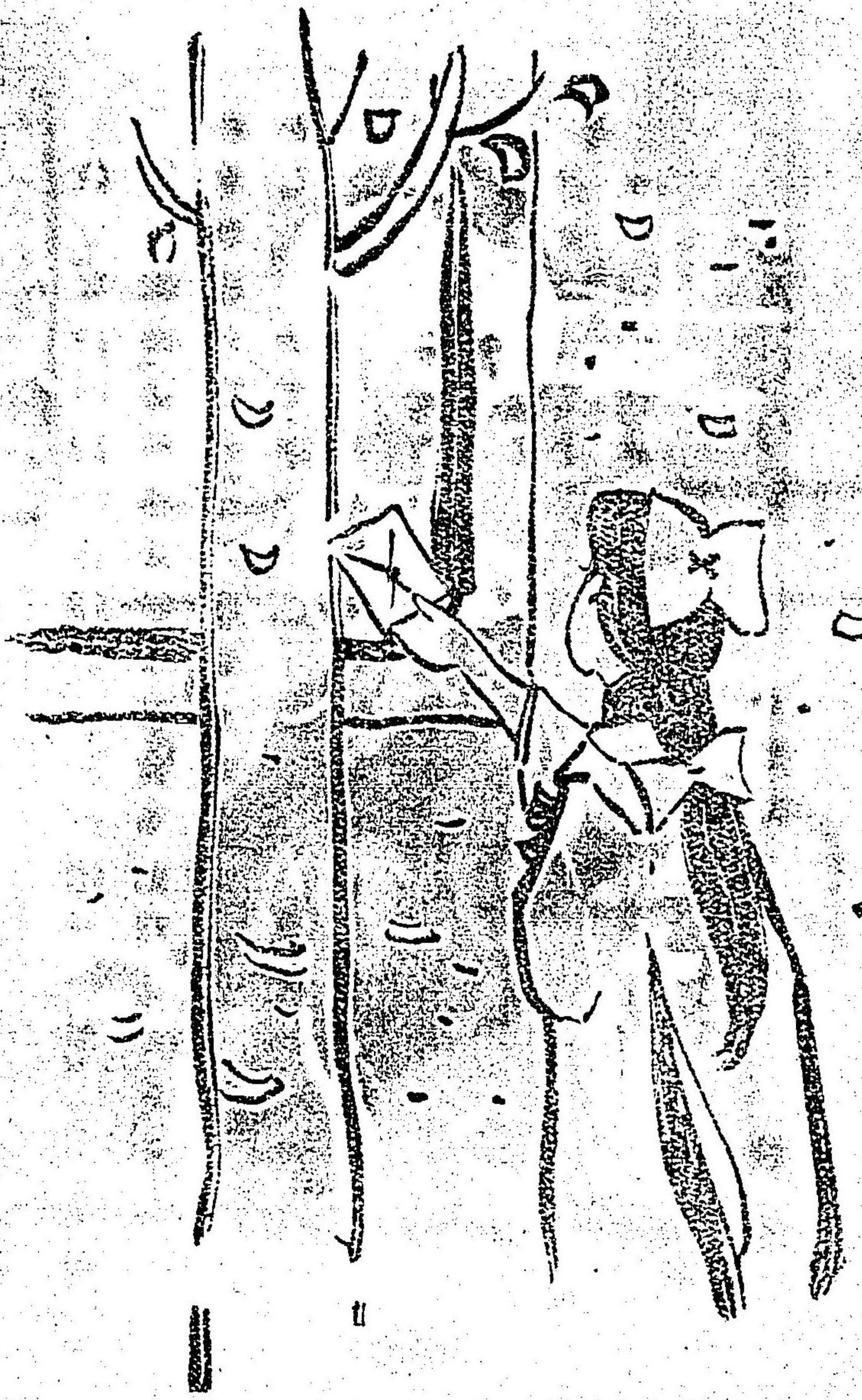
行きてまた、僕の愛するMちゃんを思ひ出づ
るも……



須賀のりしやう



油のりしやう



最うながい旅から歸るときが近づいた。

夏の夜の、あの心よげな都府の色彩よ。また、こ

れを包んだ動揺した空気が、行旅まらなうた。

かしくなつて来た。

うら若きデレツタツト、あてもなく、曲線の

美に憐れさまようぢやないか。

来ませ君

行き給はずや十字街へ

一九〇八年

文彦

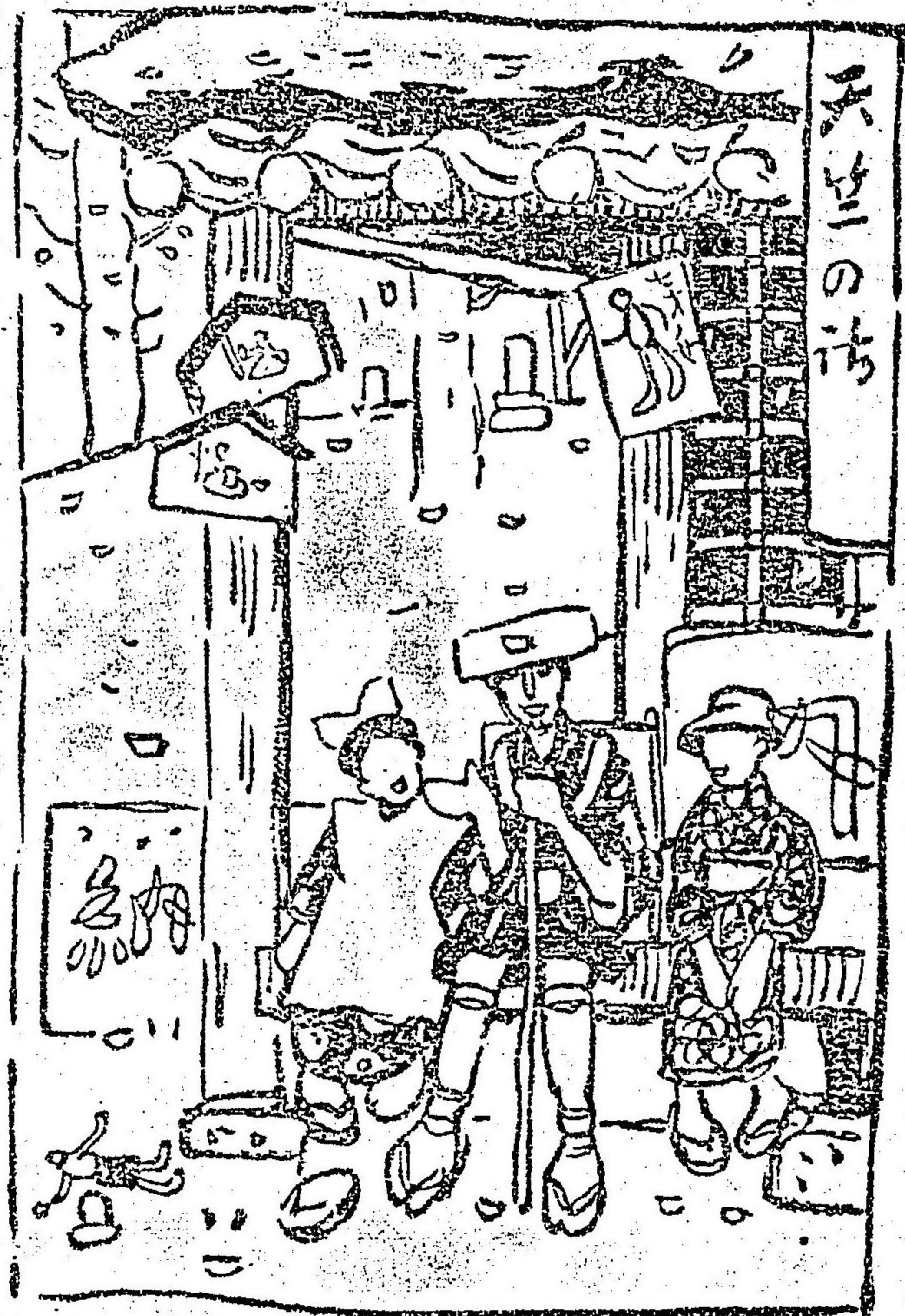
陽

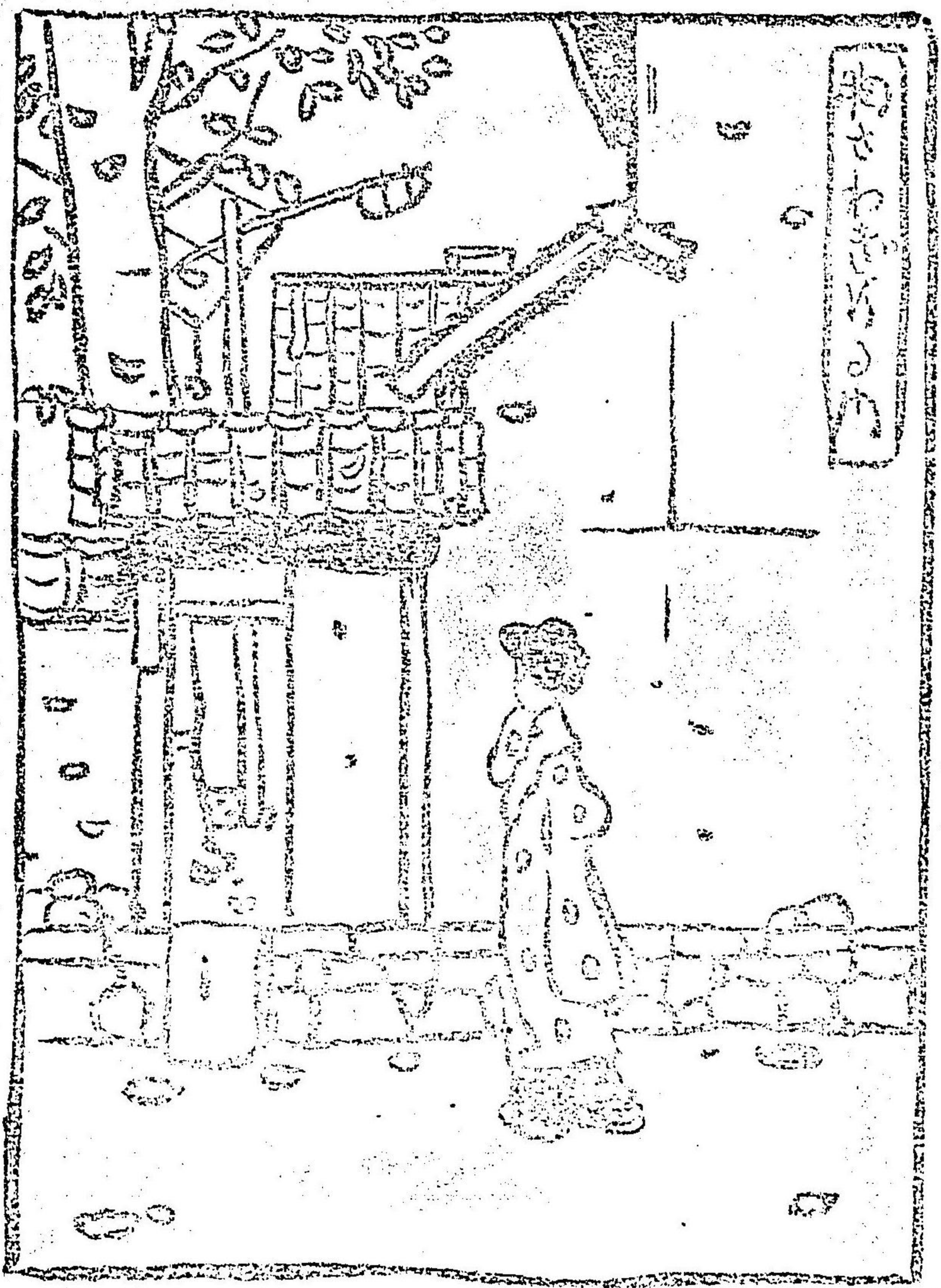
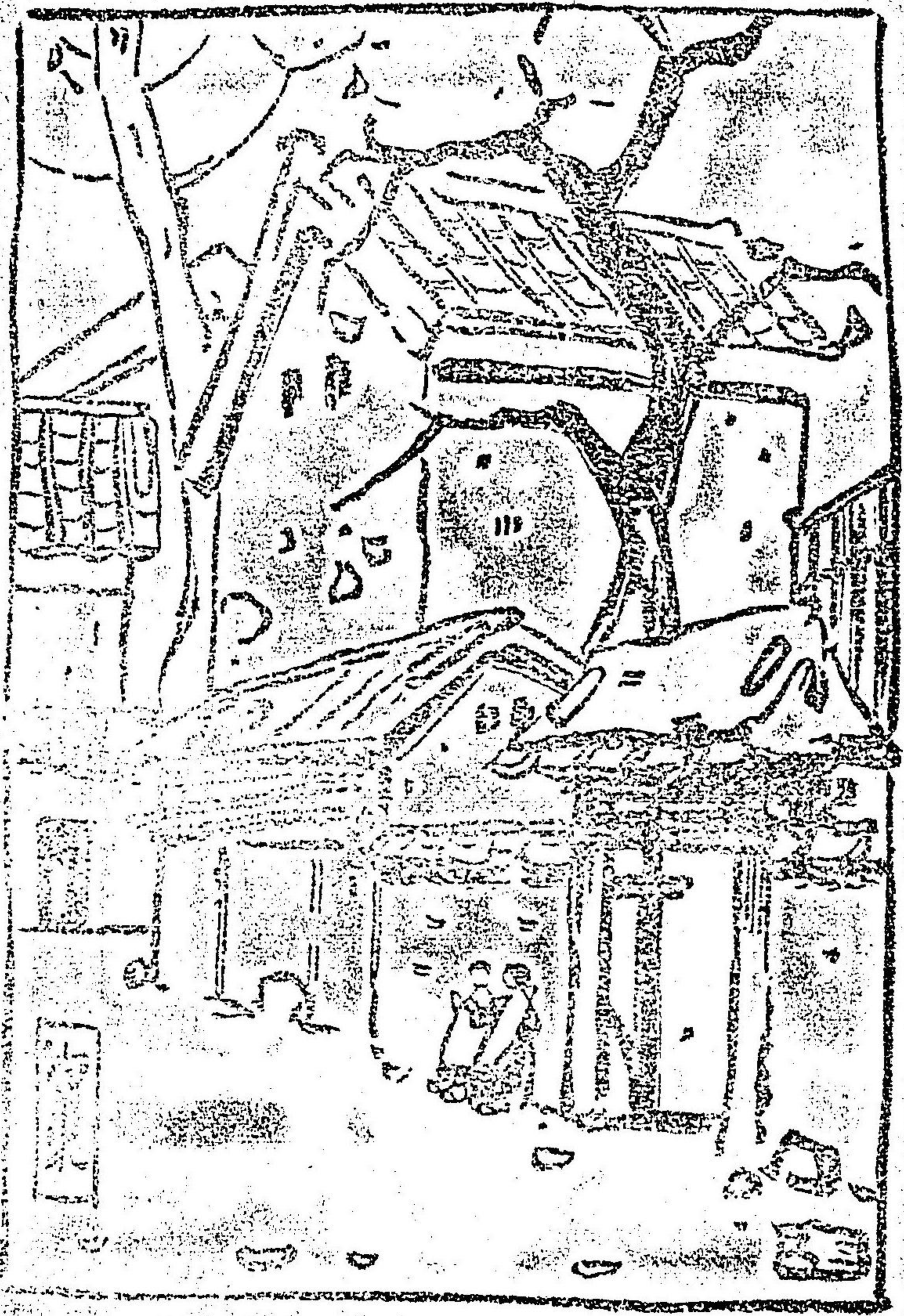


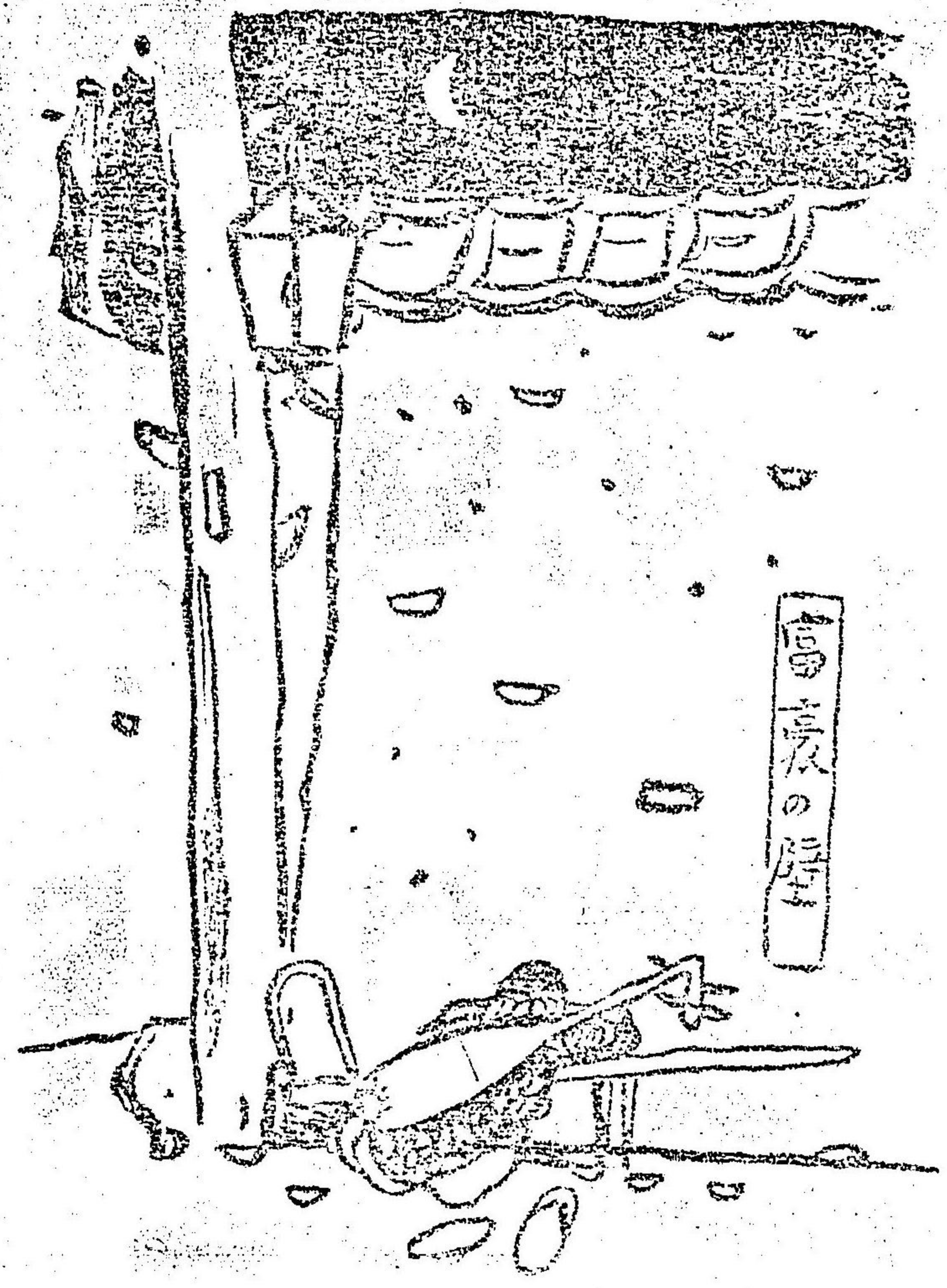
おはな



おはな









發行所

大阪府南區波野町
五丁目廿八番地

エニヤ書肆
奈仁和書房

明治四十四年二月廿五日印刷
明治四十四年三月三日發行

定價金四拾錢

著者 宇崎純一

發行所 大阪府南區難波新地五番町二百三十八番屋敷
石橋山太郎

印刷者 大阪府東區常盤町二丁目三十七番邸
佐野禎藏

印刷所 大阪府東區常盤町二丁目三十七番邸
佐野工振舎

複製許
製許

スミカミズ
ノカミズ
ノカミズ
ノカミズ

賣所

東京 至誠堂、明文館
京都 東枝律書房
大阪 發文館、賢文館

大 小谷書店、田中書店、文德堂本店
中村盛文堂、家文齋、中村積徳堂
柳々堂、平野書店、文德堂支店
登美屋書店、エニヤ書店、全盛著名書店

宇崎純一氏作

ド一カズカミス

◀ 錢貳金税郵 錢五拾金 冊一 價定 ▶

第 二 第	第 一 第
見まつひまな 怒のわたり 更いタ	白粉の歌 春の夜の色彩 かるた會のわたり 眠と人の情緒

第 四 第	第 三 第
近 刊	さびしきのはて カナリヤ COME HERE 第 一 日

店書中川 四座天辨筋堀區道區南市阪大 所行發

宇崎純一氏作

ド一カの子

◀ 錢貳金税郵 錢五拾金 卷一 價定 ▶

花の巻	歌の巻
たんぼの歌 見せないわよ 叔母さんへ ひみ	花ちゃん學校へ 兄さまのよれ くろい出 どこへ? アメリカへ

堂徳文井福 詩南橋安常區 西市阪大 所行發

文藝 白楊 雜誌

行發日一回一月毎

本誌は敢て同人の機關ではない。そんな狭義な意味で「白楊」が生れてゐるのではない。もつと廣い意味に於て呼吸してゐるのだ。だから誰れでもかまはない、傑れた作でさへあれば、本誌全部でもさしあげていい理である。と、門戸を開放して宣言したのはこのためだ。噫、「白楊」が夢寐にも忘れたくないのは關西文藝復興と云ふ貴い情人である。

主 幹 田村華陽

◀ 錢二金税郵 錢八拾金 冊一 價定 ▶
◀ 錢八圓壹金 共 税 郵 金 前 冊 六 ▶
◀ 錢六拾圓貳金 共 税 郵 金 前 冊 二十 ▶

社 揚 白 七 七 二 町 番 五 地 新 波 難 區 南 阪 大 所 輯 編
房 書 和 仁 奈 八 二 日 丁 五 町 後 備 區 東 阪 大 所 行 發
肆 書 屋 美 登 角 南 西 辻 東 丁 一 橋 生 用 區 東 阪 大 所 發 賣

田村華陽氏作

宇崎純一氏裝幀
十龜廣太郎氏挿畫

小説集

沈める莓酒

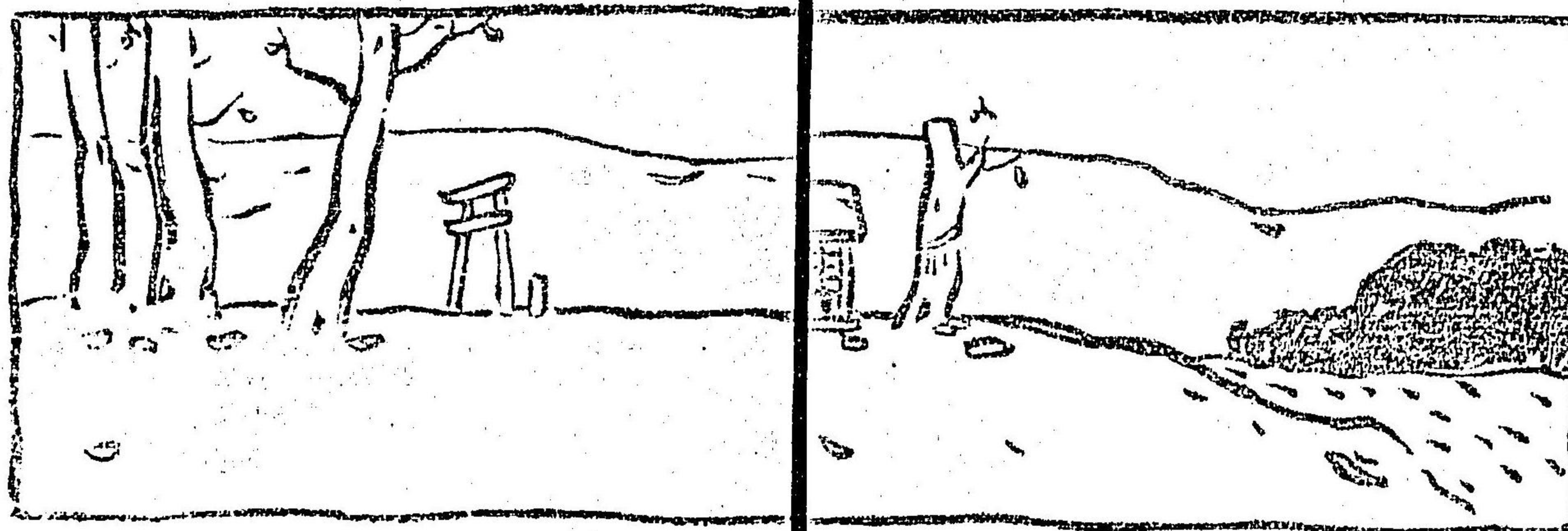
四六判帙入
製本未成
定價郵税未定

長篇女ばかりの家、以下新らしき十一篇の作集にして、すべて運命が美しきロマンスを創作せる、痛ましき歡樂の思ひ出なり。現今の復活者として、はた覺醒者として、我が年若き、一流の新進作家田村華陽氏の、この沈める莓酒を得たるは、以つて沈滞せる關西文壇の誇りとなす。これ弊書店が世に薦むるの所以なり。

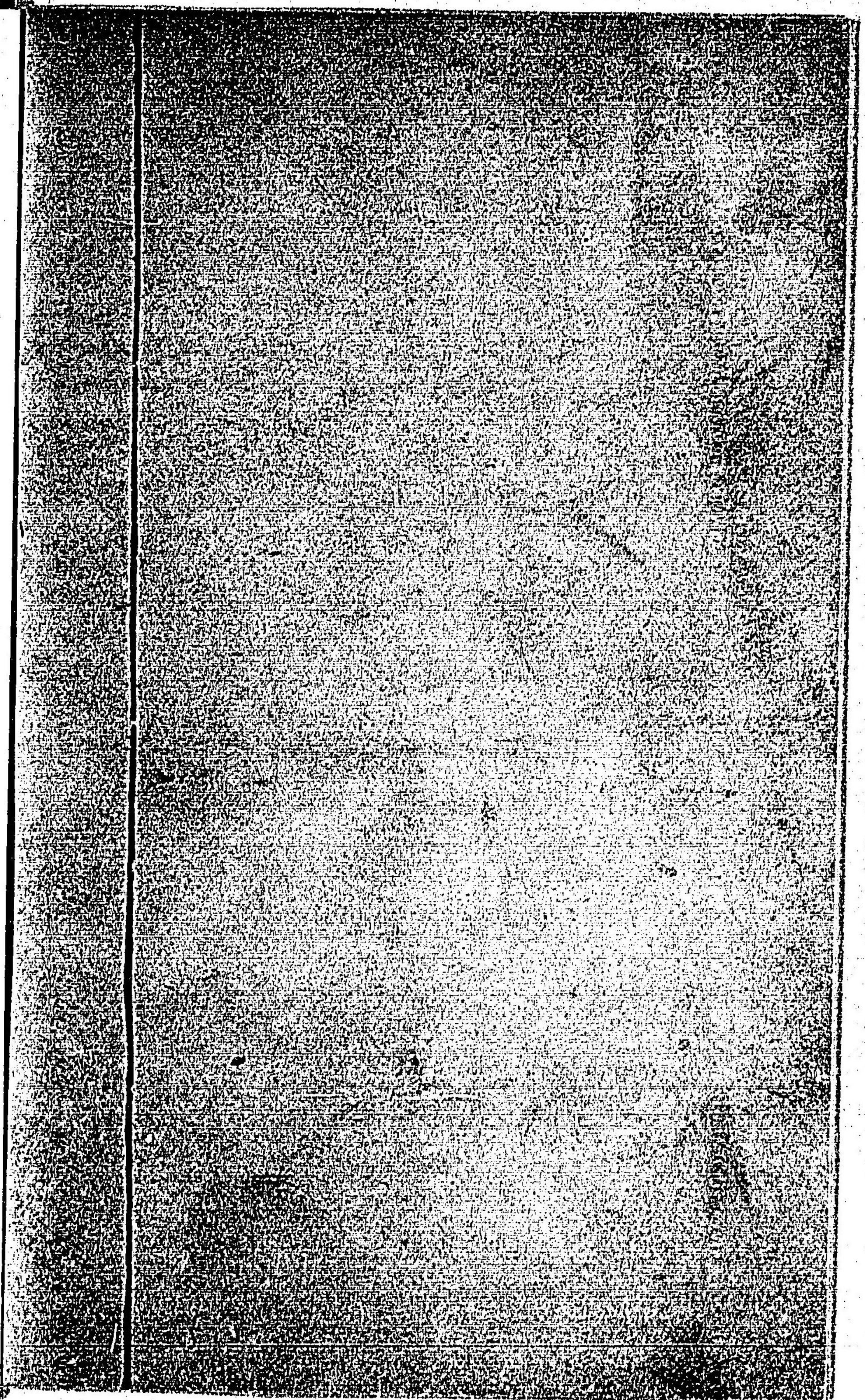
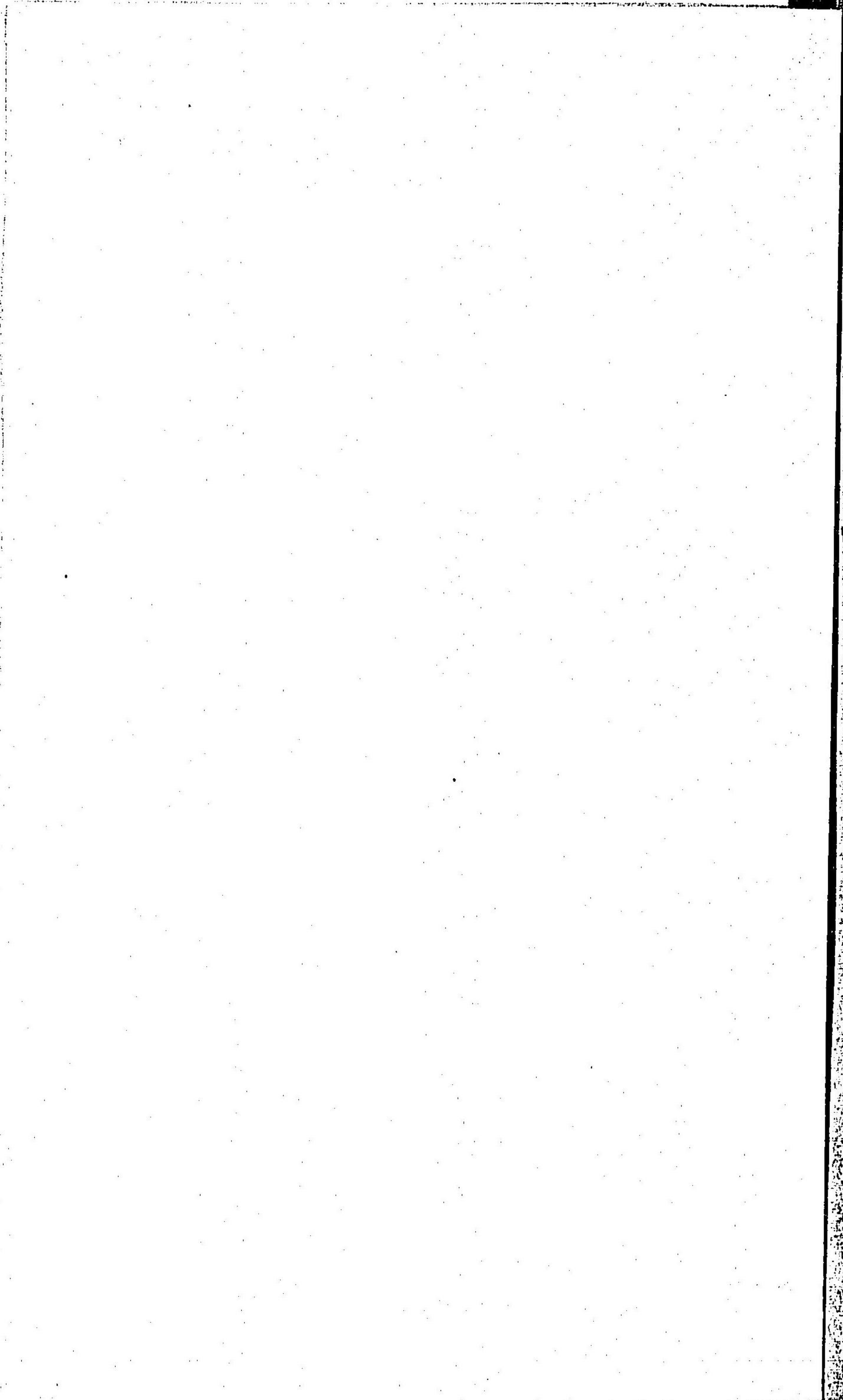
大阪市南區道頓堀筋辨天座西

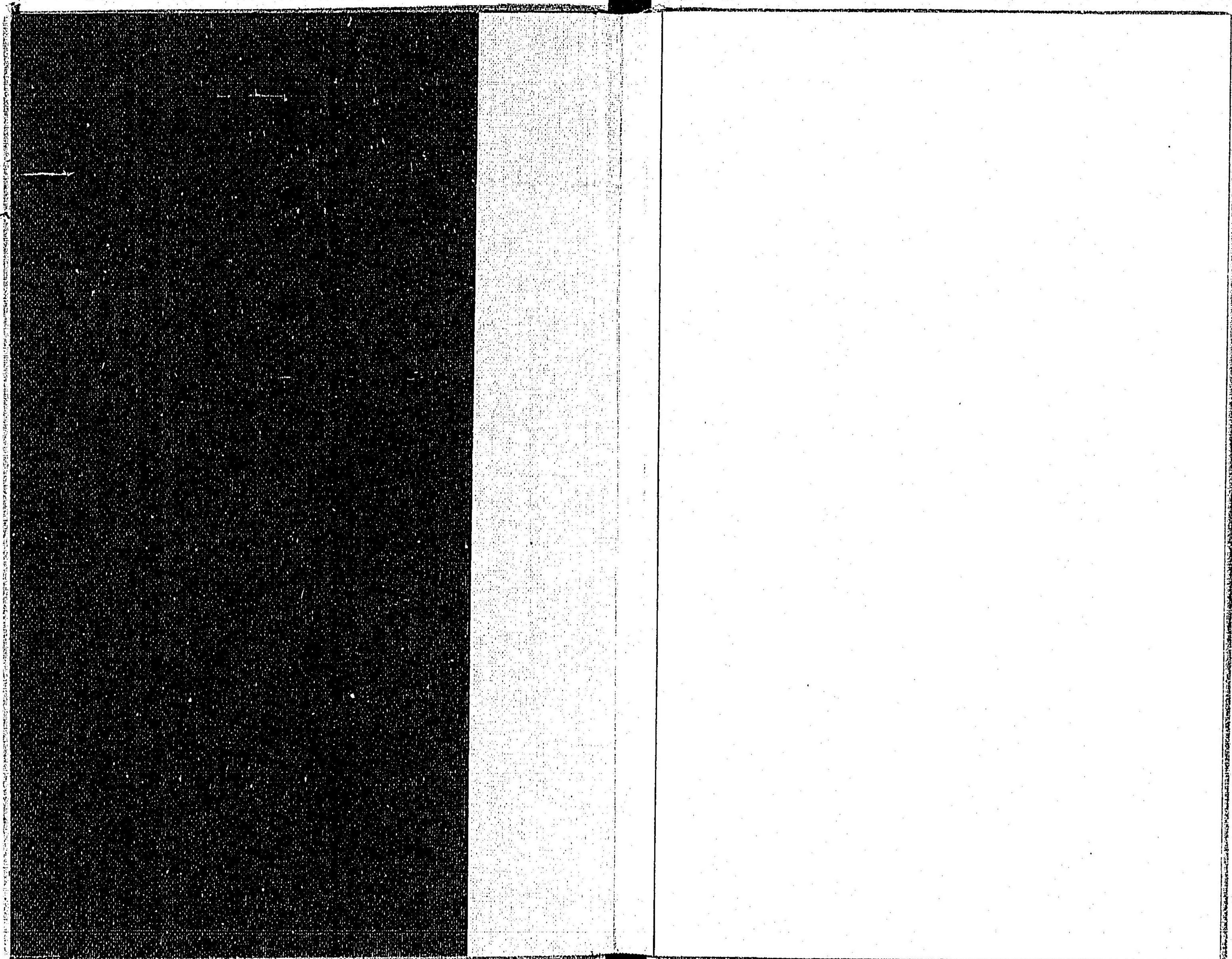
發行所

田中書店



264
815





1945

特23

263

スミカズ画集

国立国会図書館

070117-000-3

特23-263

スミカズ画集

宇崎 純一/画

M44

CEC-1093



